

## 保育者意識と卒業後の進路について

—本学幼児教育科学生に対するケース・スタディ的調査を通して—

伊藤正美  
前田キミヨ

### I. はじめに

本学幼児教育科学生の卒業後の進路状況を見ると、年度によって若干の増減はあるが、やはり取得した保育資格や幼稚園教諭免許状を生かした職場へ就職した者が圧倒的に多く、いわゆる保育専門職（以後専門職という）就職率は過去3か年を示してみると、第1表のとおりである。

第1表 本学の保育専門職就職率

入学年度	人数(%)	卒業者数	保育専門職 就職者数 (%)	内 訳		
				幼稚園(%)	保育所(%)	施設(%)
平成2年度		118	101(85.6)	47(46.5)	49(48.5)	5( 5.0)
平成3年度		124	93(75.0)	27(29.0)	65(69.9)	1( 1.1)
平成4年度		100	80(80.0)	34(42.5)	37(46.3)	9(11.3)
計		342	274(80.1)	108(39.4)	151(55.1)	15( 5.5)

平成2年度（入学年）85.6%，3年度75.0%，4年度80.0%であり、更にその内訳をみると各年度を通して保育所へ就職した者が最も多く、専門職就職者の半数ないし半数以上を占めている。ついで幼稚園に就職した者が多く、両者を合計すると専門職就職者の9割以上を占める。残りが保育所を除く児童福祉施設や成人ならびに老人福祉関係施設（介護職を含む）に就職する者で、年度によって一定しないが5ないし10%程度を占めている。いずれにしても本校の専門職就職率は全国平均<sup>1)</sup>を上まわったかなり高い数値になっているが、この就職率の背景には学生を送り出す大学側の諸条件とともに受け入れる採用者側の諸条件が絡み合っている。そこでわれわれは、送り出す側の立場からではあるが、専門職就職率に影響する諸条件に迫っていきたいと考える。

一般に保育科系学生の入学志望動機や目的意識の高さは通説となっている。本学でも“子どもが好きだから”とか“小さい頃からの夢だった”“免許状や資格をとって保育や幼稚園の先生になりたい”等々の理由で入学してくる者が多い。彼女たちは2年間のプロセスを経て既述したような専門職場へ就職していくが、入学当初の保育者への意識や志向が2年間でどのような変遷をたどるのであろうか。特に幼稚園、保育所、施設という各専門職場によって、どのような差異が示されてくるのであろうか。また卒業時に内定する就職先は入学当初の志望とどのような関わりになっているのであろうか。

1) 私立短大保育系学科卒業生の就職状況調査によると、専門職就職率全国平均は平成4年3月58.3%，平成5年3月61.9%，平成6年3月62.8%である。

本研究は以上のような諸点を踏まえながら、①本学幼児教育科学生の保育者への意識や志向<sup>2)</sup>の実態ならびにその変容過程を明らかにするとともに②実際に就職する卒業後の進路とどのような関わりになっているのかをケーススタディ的手法を用いて解明しようとするものである。

## II. 調査方法

### 調査対象

平成4年度幼児教育科入学生102名、ただし入学時調査(第1回調査)に限り5年度入学生130名をも実施対象とした。

### 調査実施時期

- 第1回調査 平成4年5月(4年度入学生)、平成5年5月(5年度入学生)の入学時点
- 第2回調査 平成5年5月の2年生進学時点
- 第3回調査 平成6年2月の卒業時点

### 調査内容

各回に実施したアンケートの調査項目を以下に示す。また本論文の最終部分にアンケートの全文を示すが、設問は多肢選択法と自由記述法の併用である。特にこの調査では自由記述法を多用したが、その理由は選択肢にとらわれない生の反応をできるだけ多く引き出したいと考えたからである。

#### 第1回調査項目

- 基礎資料……生年、出身高校、出身幼児教育機関、ボラ体験の有無、家事へのかかわり度、本学科入学感想
- 本調査……入学志望順位・理由、資格取得希望・理由、卒業後の進路・理由・継続度、保育者への適否・理由、保育者資質の重要度、幼稚園・保育所・施設のとらえ方

#### 第2回調査項目

- 基礎資料……所属ゼミ名、ボラ体験の有無、現時点での入学感想
- 本調査……資格取得希望と変化の有無・理由、卒業後の進路と変化の有無・理由、各種実習受講の有無・実習体験後の保育者志向度と理由、保育者への適否と理由、幼稚園・保育所・施設のとらえ方・保育者としての自信度・保育者資質の重要度

#### 第3回調査項目

- 卒業後の進路内定の有無と内定の経緯、内定進路と希望進路の一致度と理由・満足度、内定進路への意欲、進路未定者の理由と今後の対処法、就職相談室活用希望の有無

## III. 結果と考察

### 1 入学志望順位とその理由

本学幼児教育科への入学志望順位を、平成4年度、5年度入学生についてまとめた結果が、第2表である。

---

2) 保育者意識や保育者志向については、すでに多くの研究で取りあげられており、2年間のプロセスの中でさまざまに変容することが明らかにされている。特に実習による効果の大きいことが指摘され、実習前後の比較調査によって肯定的意識変容を起こす学生が多くなることが報告されている。

第2表 入学者の志望順位

入学 志望順位	人数(%)	入 学 年 度		計
		4 年 度	5 年 度	
第 1 志 望		76(76.0)	81(62.8)	157(68.6)
第 2 志 望		15(15.0)	29(22.5)	44(19.2)
そ の 他		9 (9.0)	19(14.7)	28(12.2)
計		100	129	229

年度によって若干の差異はあるが、第1志望で本学科へ入学してきた者は、4年度が76.0%、5年度はやや下まわって62.8%であった。両者を平均すると約7割に近い学生が第1志望順位で本学科に入学している。この数値は高いほど望ましいとされているが、より重要なことはどのような動機で入学してきたかが問われることであろう。これについて、自由記述された志望理由を分析すると、次の6つのカテゴリーに大別できる。

(1) 子どもが好き、接触することが好きだから

例 子どもが好き、かわいい、純粋な心の持ち主だから、子どもと遊んだり世話したりするのが好き、心が和む、楽しいから……等々を表現した反応

(2) 保育者になりたい、保育の職場で働きたいから

例 小さい頃から保育や幼稚園の先生になりたいと思っていたから、保育者になるのが夢、憧れだったから、子どもと接する仕事がしたい、そういう職場で働きたいから、子どもを理解できる先生や教えていただいた先生（保母）のような人になりたいから……等々を表現した反応

(3) 資格・免許状が取得できるから

例 保母資格と幼免の両方がとれるから、幼稚園免許状（又は保母資格）が欲しかったので、何か資格がほしかったから……等々を表現した反応

(4) 本学科の特色や利点にひかれたから

例 地元で通学に便利、校風が好き、よい施設設備だから、就職率が高く体験入学して良い印象だったので、実習が多く技術をしっかり身につけられるから……等々を表現した反応

(5) 受験に失敗、本学科に合格したから

例 本当は〇〇になりたかったが失敗したので、第1志望に不合格でここが受かったから、いろいろ迷ったが一応受けてみたら合格したので、とりあえず短大に入ろうと思ったから……等々を表現した反応

(6) その他（上記分類に該当しない理由）

例 将来に役立つから、幼児教育科は子どものためになるから、母から短大ならこの学校と勧められたから、OLになりたくなかったから、この大学が自分の能力に合っていると思ったから……等々を表現した反応

以上のカテゴリーにしたがって、第1志望入学者と非第1志望入学者別に志望理由を分類してみたものが第3表である。数値は反応数である。<sup>3)</sup>

3) 同一人でいくつかの理由を併記している場合、そのすべての反応をカテゴリーにしたがって分類した数である。

第3表 入学志望理由

カ テ ゴ リ	第1志望入学者 (157名)	非第1志望入学者 (72名)
(1) 子どもが好き, 接触することが好き	40(16.8)	8 (8.3)
(2) 保育者になりたい, 保育職場で働きたい	79(33.2)	6 (6.3)
(3) 資格・免許状が取得できる	38(16.0)	12(12.5)
(4) 本学科の特色・利点にひかれた	51(21.4)	25(26.0)
(5) 他校の受験に失敗, 本学科に合格した	2 (0.8)	29(30.2)
(6) その他 (上記に該当しない理由)	28(11.8)	16(16.7)
合 計 反 応 数	238	96
平 均 反 応 数	1.52	1.33

第1志望入学者は平均1.52倍, 非第1志望入学者は平均1.33倍の反応数であった。この表からわかるように, 第1志望入学者と非第1志望入学者とでは明らかに入学志望理由が異なる。つまり第1志望入学者は“子どもが好き”“保育者になりたい”“資格がほしい”といった(1)(2)(3)のカテゴリーに分類される積極的理由で入学している者が多いのに対し, 非第1志望入学者は(4)(5)(6)のカテゴリーに含まれるいわば消極的理由で入学している者が多い。

このことは第1志望入学者は保育者志向を持つ目的意識の強い学生であることを物語っており, 予想されたこととはいえ, うなずかれる。これに反して非第1志望入学者は他校の受験に失敗, もしくは第1志望を断念した結果の本学科入学者であったり, 本学科の特色や通うのに便利だからといった利点にひかれて入学してきた者, あるいは上記分類に入らないその他の理由で入学してきた者たちであり, 入学志望理由が消極的であることは否めない。ただ彼女たちが失敗または断念した第1志望校について, 記述された志望理由から類推してみると, 次の14事例を拾うことができた。

- “他校の幼児教育科の受験が不合格でしたので” (2名)
- “教育者という立場では同じだけど, 私は小学校の先生になりたかった” (2名)
- “幼児教育科と生活科とで迷ったが結局本学科に合格したので” (2名)
- “看護婦養成校の第1希望が不合格だったから” (2名)
- “理学療法士の学校が不合格でしたので”
- “4大の心理学科にいきたかったが……”
- “初めは福祉関係の仕事の相談員になりたかったが受験に失敗し, この短大が良かったから”
- “本当は栄養士になりたかったから”
- “英語関係の学科に進みたかったけど失敗したので”
- “秘書科に落ちたので”

以上の記述例からわかるように, 幼児教育科に近接した専門学科の受験に失敗した者, 或は断念した者が多く, 全く無関係の別系統と考えられる専門学科からの転向者は少ないとみられる。そうであれば幼児教育科への適応も早いのではないだろうか。

## 2 入学時における資格取得希望とその理由

すでに入学志望理由でみてきたように, 入学者の多くは資格や免許状の取得を1つの目標としており, 何らかの資格取得が入学者全体の共通目的にもなっている。本学科では, 卒業と同時に2つの資格が取得できるようにカリキュラムを編成しているので, 第4表に示すように両資格取得希望者が4年度入学者で98.0%, 5年度入学者で99.2%であった。

第4表 入学時点の資格取得希望

選択肢	人数(%)	入 学 年 度	
		4 年 度	5 年 度
保母資格のみ		0	0
幼 免 の み	1 (1.0)	1 (1.0)	0
両 方 と も	98(98.0)	128(99.2)	
そ の 他	1 (1.0)	1 (0.8)	
計	100	129	

4年度入学者のうち僅かに1名の者が幼稚園教諭免許状のみの取得でよいとしている。その理由として“幼稚園の先生になりたいから”と回答している。また「その他」に回答した1名の者は“一応両方取るようにしたけれども幼稚園教員免許状のみを取得したいので、これからじっくり考えたい”と記述しており、選択に迷ってその他に回答したことがわかる。

一方、5年度入学者の中にも僅かに1名の者が「その他」に回答している。その理由は“これから先、保母や幼稚園の先生になる予定がないから勉強についていく自信がない”と回答し、“しかしできれば取りたい”と結んでいる。いずれにしてもこの3名を除く大多数の者は2つの資格を卒業と同時に取得することを希望しており、その理由は多少の差異はあるが次の5事例に代表される内容と同様である。

- “保母になりたいと思っているが、両方とれるものならとっておきたい”
- “幼稚園の先生になるつもりですが、とれるなら両方とりたい”
- “両方とっておけば、どちらの先生にもなれるし、就職に有利だから”
- “どちらかにこだわるつもりはなく、両方の勉強をすれば自分のプラスになるから”
- “保母になるか幼稚園の先生になるかまだ決めてないが、取れる時に2つ取っておいた方がよいから”

つまり資格を特に必要としない進路希望の者でも、こと資格については取れるものなら2つとも取っておきたい、将来なにかの役に立つから、といった現実的な考え方をする者が多いことを示している。

### 3 入学時における卒業後の希望進路とその理由

第5表は4年度・5年度入学者に対して卒業後の希望進路を選択させ、進路別にまとめたものである。

第5表 入学時における卒業後の希望進路

選択肢	人数(%)	入 学 年 度		計
		4 年 度	5 年 度	
専 門 職	できれば幼稚園に就職したい	41(41.0)	54(41.9)	95(41.5)
	できれば保育所に就職したい	28(28.0)	45(34.9)	73(31.9)
	できれば施設に就職したい	5 (5.0)	8 (6.2)	13 (5.7)
そ の 他	26(26.0)	22(17.0)	48(21.0)	
計	100	129	229	

最も多く選択された進路は「できれば幼稚園に就職したい」で、4年度41人(41.0%)、5年度54人(41.9%)を占め、両年度を通して同様な比率であった。ついて「できれば保育所に就

職したい」が選択され4年度は28人(28.0%)であったが5年度は45人(34.9%)とかなり多くなっている。「できれば施設へ就職したい」と回答した者は両年度を通して5～8人(5～6%)の範囲にとどまった。

また、入学のこの時点では卒業後の希望進路が固まっていない者も多く、「その他」に回答した者が4年度で26人(26.0%),5年度で22人(17.0%)であった。両年度合わせると48人(21.0%)になるが、その理由を更に調べていくと、第6表に示すように

第6表 「その他」に回答した者の進路の内訳

自由記述		人 数	入学年度		計
			4年度	5年度	
専 門 職	保育所か幼稚園又はどちらでも可	9	11	20	} 26
	施設か幼稚園又は保育所 幼稚園か小学校	1	3	4	
	託児所	1	1	2	
非 専 門 職	一般企業 会社員	5	3	8	} 15
	一般公務員	1	0	1	
	保育者以外の仕事・職場	2	0	2	
	進学 4大又は専門学校	2	2	4	
まだ決めていない		5	2	7	
計		26	22	48	

①保育所か幼稚園のどちらでもよい、又はどちらかに就職したい者20人 ②施設か幼稚園、或は施設か保育所、或は幼稚園か小学校に就職したい者4人 ③託児所2人 ④一般企業8人 ⑤一般公務員1人 ⑥保育者以外になりたい仕事がある2人 ⑦4大または専門学校進学希望4人、そして最後に⑧まだどこへ進むか決めていない7人というように卒業後の進路が全く未定と回答した者はごく少数であった。

したがって非専門職就職希望者と未定者を除いた残りの207人(90.4%)の者が専門職就職希望者ということになる。もち論専門職就職希望者は2年間のプロセスを経て、さまざまに変容していくであろうが、それにしても入学時点で約9割に相当する者が何らかの専門職につくことを目標にしていることは注目されよう。はじめにでも触れておいたが、保育科系学生は他学科系学生に比べて入学志望動機や目的意識が高いといわれているが、この資料でもそれを裏づけたことになる。

### (1) 保育所ならびに幼稚園へ就職したい理由

第7表は卒業後保育所ならびに幼稚園へ就職したいを選択した者について、その理由を分析し、それぞれ7つのカテゴリーにまとめたものである。

第7表 保育所・幼稚園に就職したい理由の分析

保育所のカテゴリー	人数 (%)	幼稚園のカテゴリー	人数 (%)
① 乳幼児を対象とした保育・長時間の保育ができるから	32 (43.8)	① 幼児を対象とした幼児教育ができるから	28 (29.5)
② 出身園が保育所であったから	10 (13.7)	② 出身園が幼稚園なので	24 (25.2)
③ 永くつとめられるから	7 (9.6)	③ 保育所保育は大変だから	16 (16.8)
④ 保育所保育の方が自由でのびのびしているから	6 (8.2)	④ 小さい頃からの夢、憧れだったから	11 (11.6)
⑤ 地元には保育所しかないから	6 (8.2)	⑤ 特に理由はないが幼稚園がいいから	5 (5.3)
⑥ 特に理由はないが保育所がいいから	5 (6.8)	⑥ その他 (上記に入らない理由)	9 (9.5)
⑦ その他 (上記に入らない理由)	7 (9.6)	⑦ 自由記述, 無回答	2 (2.1)
計	73	計	95

まず保育所に就職したいを選択した者の理由をみていくと、最も多い記述は保育所保育の特徴ともいえる ①「乳幼児を対象とした保育や長時間の保育ができるから」といった理由をあげる者で73人中32人(43.8%)を占めた。

“赤ちゃんや小さい子の世話をしたいから”  
 “子どもたちと長い時間接していただけるから”  
 “0～5歳までの年齢幅のある子どもたちをみるので、やりがいがあるから”等々……

つぎに多いのは ②「出身園が保育所であったから」で、これに関連する理由をあげた者は10人(13.7%)であった。

“小さい頃通っていて雰囲気が良かったから”  
 “出身園へ戻って働きたいから”  
 “受け持ってくれた出身園の先生(保母)のようになりたいから”等々……

以下多い順に、③「永く務められるから」7人(9.6%)

“保育所の方が結婚後も永く務められるから”  
 “永く務められ、自分の子育てにも役立つから”等々……

④「保育所の方が自由でのびのびしているから」6人(8.2%)

“教育が主でないので、のびのびしているから”  
 “すごく自由というか、のびのびした感じがあるから”等々……

⑤「地元には保育所しかないから」6人(8.2%)

“自宅通園したいが附近には保育所しかないから”  
 “近くに保育所しかないから”等々……

⑥「特に理由はないが、保育所の方がいいから」5人(6.8%)

⑦「その他(上記分類に入らない理由)」7人(9.6%)であった。

同様にして幼稚園に就職したいを選択した95人についても、その理由を分析してみると、最

も多くあげられた記述は ①「幼児を対象とした幼児教育ができるから」で28人(29.5%)を数えた。すでに触れたように保育所へ就職したい理由で最も多かった記述は、保育所保育の特徴ともいえる「乳幼児保育や長時間の保育ができるから」であったが、幼稚園に就職したい理由においても幼稚園教育の特徴ともいえる記述が1位を占めたことは大変興味深い。その理由をみると、

“最も大切な時期にいろいろと教えたいから”  
 “3～5歳の、ある程度対話のできる子どもの方がやりやすいから”  
 “勉強や遊びなど幅広く教えることができるから”等々……

次に多かった理由は ②「出身園が幼稚園だから」に関連した記述をあげる者で24人(25.2%)であった。これは保育所に就職したい理由においても認められた記述で、幼稚園・保育所ともに出身園の影響の大きいことがわかる。第3位に多かったのは ③「保育所保育は大変だから」を理由にあげた16人(16.8%)の記述であり、幼稚園の良さというよりも主として保育所保育の大変さを指摘し、だから幼稚園に就職したいとしている点に特徴がある。

“赤ちゃんの世話は自信がないし怖いから”  
 “保育所は子どもと接する時間が長いから”  
 “幼稚園の方が時間がきまっているし、休みが多いから”等々……

このような記述は保育所に就職したい理由においては殆んど認められなかった。むしろその反対で、幼稚園就職希望者が大変だからと敬遠した乳幼児保育や長時間の保育にひかれて保育所に就職したいという者が最も多かったのであり、両者の価値観の違いが感じられて興味深い。第4位の理由は ④「小さい頃からの夢、憧れだったから」の11人(11.6%)であり、同様な記述は保育所に就職したい理由においては殆んど認められなかった。僅かに2例、その他に分類した理由の中に、

“前々から望んでいた職場だから”  
 “昔からの夢だったから”

があったが、やはり小さい頃からの夢、憧れの対象になりやすいのは幼稚園の先生のような気がしないでもない。

一方、保育所のカテゴリの中で ④「自由でのびのびしているから」6人(8.2%) ⑤「地元には保育所しかないから」6人(8.2%)の理由は、幼稚園のカテゴリでは発見できなかった。確かに保育所は乳幼児を保育することが目的であり、幼児教育を行っている幼稚園とは趣を異にしている面もみられるので、そのあたりの差異が保育所の方がのびのびしていると見られたのであろうか。また地域によっては、幼稚園が全く設置されていない地域もあるので、地元には保育所しかないから保育所へという就職理由は肯定できる。最後の ⑥「特に理由はないが保育所(または幼稚園)の方がいいから」は両者殆んど同様な回答傾向であった。

## (2) 施設へ就職したい理由

卒業後は「できたら施設へ就職したい」を選択した13名(5.7%)の者については、その理由を次に列記する。

- ① “中学生の頃から福祉に興味があり、障害児が一生けんめい生きたいという気持ちを少しでも支えることができたらいいなと思うから” (4年度生)
- ② “親のいない子に親以上のことをしてあげられなくても、同じ人間として一緒に遊んだり悩みを聞いてあげたり

- してあげたいから” (4年度生)
- ③ “毎週日曜日に障害のある2〜3人の子たちと接する機会があって、そういう子たちのことがわかってあげられたらいいなと思うから” (4年度生)
  - ④ “家の近くに施設があって友人がそこに入っているので遊びに行ったりして、この子たちが本当に愛情に飢えているのだなと知り、何とか私でできることはないかと思うようになったから” (4年度生)
  - ⑤ “まだよく考えていないけど乳児院へ就職したい。前にテレビで放映していて何かひかれるものがあり、大変だと思うがやってみたい” (4年度生)
  - ⑥ “今のところ福祉関係を希望している。保育所や幼稚園実習に行つて、保育所や幼稚園が自分に合っていたら変わるかも知れないが” (5年度生)
  - ⑦ “保育所や幼稚園より大変だと思うけど、より身近に接することができるから” (5年度生)
  - ⑧ “施設保母は大変だけど、親のいない子などにすごく頼りにされているし、私も一緒に遊んだり話したりしてみたかったから” (5年度生)
  - ⑨ “以前に身障者や乳児院の子たちと接した時、自分は彼らを偏見で見ないようにし、むしろ手助けしたいと思ったから” (5年度生)
  - ⑩ “少しでも福祉のために協力したいから” (5年度生)
  - ⑪ “身寄りのない子たちに少しでも希望を与えられたらいいなと思い、乳児院希望です” (5年度生)
  - ⑫ “高2の春マレーシアへ行った時、現地の貧しさを見、その中で生きる子たちと接し、生き生きとしていたし、中学生の時、一度乳児院へ行ったこともあり、高校の夏休みから今まで乳児院へ手伝いに行っているから” (5年度生)
  - ⑬ “友人に耳の不自由な子がいて、小さい時からその子をみているので、少しでも分かってあげたいから” (5年度生)

上述にみられるように施設へ就職したいと回答した者の理由は、かなり具体的であることが分かる。特に事例(3)(4)(9)(12)(13)は多かれ少なかれ自分が経験した体験的理由を述べており説得力がある。また事例(5)(7)(8)のように施設の仕事の大変さを指摘しながら、それでもこの子たちを支えてあげることができればいいと感じ、施設を希望している者もいる。総じてその理由が純粋な気持ちから出ているだけに共感を覚えるけれども、こうした気持ちが今後どのように変遷していくのかを注目したい。

#### 4 入学時における専門職継続度

卒業後は専門職(幼稚園・保育所・施設)に就職したいと回答した181名の者について、その仕事をどのくらい続けたいのかを選択させた結果が第8表である。

第8表 入学時における専門職継続度

選択肢	人数(%)	4年度	5年度	計
		入学者	入学者	
一時やめて、また働きたい	41(55.4)	52(48.6)	93(51.4)	
生涯の仕事として続けたい	16(21.6)	14(13.1)	30(16.6)	
結婚するまで働きたい	6(8.1)	6(5.6)	12(6.6)	
出産するまで働きたい	2(2.7)	7(6.5)	9(5.0)	
まだわからない	9(12.2)	27(25.2)	36(19.9)	
無回答	0	1(0.9)	1(0.6)	
計		74	107	181

「一時やめて、また働きたい」を選択した者が最も多く、4年度生5年度生を合計して93人(51.4%)であった。ついで「生涯の仕事として続けたい」が30人(16.6%)、以下多い順に「結婚するまで働きたい」12人(6.6%)、「出産するまで働きたい」9人(5.0%)と続き、最後に「まだわか

らない」が36人(19.9%)であった。この「わからない」がかなり多かったのは入学時点でもあり、まだ専門職にもついていない仮定の上の予測にもなるので当然のこととも考えられる。

以上の回答結果は数値に若干の差異があるものの保育科系短大学生意識調査報告書による全国集計結果と全く同じ順位であった。つまり、ここで示された回答結果は保育科系学生の標準的反応であったということができよう。

## 5 入学時と1年後の保育職への適否とその理由

### (1) 入学時点における結果

先ず最初に入学時点における保育職への適否に対する選択結果を第9表に示す。

第9表 入学時における保育者への適否

選択肢	人数 (%)		入学年度		計
	4年度	5年度	4年度	5年度	
非常にむく	11(11.0)	8(6.2)	19(8.3)	79 (34.5)	
ややむく	29(29.0)	31(24.0)	60(26.2)		
どちらともいえない	37(37.0)	59(45.7)	96(41.9)		
あまりむかない	6(6.0)	6(4.7)	12(5.2)	13 (5.7)	
全くむかない	0	1(0.8)	1(0.4)		
わからない	17(17.0)	24(18.6)	41(17.9)		
計	100	129	229		

入学時点でもあり自分が保育者にむくかの間に対して、「どちらともいえない」が最も多く選ばれ、4年度37人(37.0%)、5年度59人(45.7%)で、両年度を合計すると96人(41.9%)であり、「わからない」41人(17.9%)を加えると、入学生の約6割(137人59.8%)にもものぼる。その理由の主なものを示す

“子どもはすぐ好きだけど人前で喋ることが苦手だから”

“実習にまだ一度も行っていないので、子ども相手に自分がどれだけできるかわからないから”

“子ども好きだけでは保育者になれないと思うので、勉強してむくようにすればよいと思うから”等々……

つぎに多いのは、「ややむく」60人(26.2%)で「非常にむく」19人(8.3%)を加えると79人(34.5%)の者が自分は保育者にむくと回答している。その理由をみると、“子どもが好き”“かわいい”“私は子どもから好かれる”といった記述が共通してあげられている。そして更に

“小さい子を世話したり遊んだことがあるので慣れているから”

“周りの人からむいているとよく言われ、自分でもそう思うから”

といった記述をつけ加えている者も多い。

最後に「あまりむかない」12人(5.2%)と「全くむかない」1人(0.4%)について、その理由をみると、

“楽しんでやっていく自信がないから”

“子ども好きでもないから子どもの気持がよく分からないから”

“遊んでいても子どもたちが寄ってこないし、接触してもどうしてよいか分からないから”

といった記述内容であった。5年度入学生で「全くむかない」を選んだ1名の者の理由は、

“子どもをすなおに受け入れることができないから、子どもは苦手”

と記述しており、希望学科をとり違えて入学してきたかと疑わせるようなケースであった。

## (2) 1年後の結果とその変化

入学時の回答結果が実習を体験した1年後には、どのように変化するのであろうか。われわれは1年後の今回の調査では、保育者一般への適否ではなくて保育所保母への適否、幼稚園教諭への適否、施設保母への適否というように3区分し、それぞれの実習を通してどう思うようになったかを尋ねた。その結果を第10表に示す。

第10表 入学時と1年後の保育職への適否の比較

選 択 肢	人数 (%)	入学時の保育職への適否 (4年度生)	1 年 後 の 保 育 職 へ の 適 否		
			幼 稚 園 教 諭	保 育 所 保 母	施 設 保 母
非 常 に む く	11(11.0)	40	4 (4.3)	8 (8.5)	0
や や む く	29(29.0)		35 (37.3)	33 (35.1)	2 (2.1)
ど ち ら と も い え な い	37(37.0)		32(34.0)	33(35.1)	26(27.7)
あ ま り む か な い	6 (6.0)	6	12(12.8)	13(13.8)	24(25.5)
全 く む か な い	0		(6.0)	14 (14.9)	13 (13.8)
わ か ら な い	17(17.0)		10(10.6)	10(10.6)	11(11.7)
無 回 答	0		3(3.2)	5(5.3)	22(23.4)
計	100		94	94	94

資料は4年度入学生100名中資料が回収された94人の結果である。

### ①幼稚園教諭・保育所保母への適否

自分が幼稚園教諭に「むいている」<sup>4)</sup>を選択した者は35人(37.3%)、「むいていない」<sup>5)</sup>を選択した者は14人(14.9%)であり、一方保育所保母の方は「むいている」33人(35.1%)、「むいていない」13人(13.8%)であった。また「どちらともいえない」は前者32人(34.0%)、後者33人(35.1%)であった。以上からわかるように保育所保母と幼稚園教諭に対する適否は殆んど同数の回答結果であり、両者間に反応差が認められなかった。

この回答結果を1年前の入学時と比べてみると、「どちらともいえない」「わからない」が前回は合計して半数以上(54.0%)にも達したが、今回は10%程度下まわり全体としてはより明確な態度表明になっている。しかし「非常にむく」「ややむく」の積極的反応が前回は40人(40.0%)を占めたのに対し、今回は、保育所保母33人(35.1%)幼稚園教諭35人(37.3%)と僅かながら減少している。そしてその分「あまりむかない」「全くむかない」の消極的反応が増加している。つまり若干名の者が保育職に対する自己の適否をプラスからマイナス方向へ変化させたことを示唆している。実際に実習を体験してみると予期以上にその大変さや困難性がわかり、入学時のプラス判断をマイナス方向へ修正せざるを得なかった者が数名出たものと解釈される。彼女たちが自由記述した回答の中から、実習を受けて消極的反応になった理由のいくつかを拾ってみると、

#### 〈保育所保母にむかない理由〉

“保母の仕事がどれだけ大変かを痛感したから”

4) 「非常にむいている」「ややむいている」の両選択肢を選択した者の合計である。

5) 「あまりむいていない」「全くむいていない」の両選択肢を選択した者の合計である。

“絵を書いたり物を作ったりするのが苦手だから”  
 “アートピーがあり実習中手足がカサカサになってしまい、永くは続けられない仕事だと思ったから”  
 “人間関係がよくなかったし、からだがいえなかったから”  
 “子どもを心から好きでないといけない仕事だと思ったから”等々……

#### 〈幼稚園教諭にむかない理由〉

“教育中心の内容ばかりだというのが自分の考えに合わなかったから”  
 “日案・週案・月案などを考えることが苦手のため”  
 “部分実習がうまく進められなかったし、ピアノが苦手だから”  
 “子どもをしばらくすぎているようで、あまり私にはむかないような気がしたから”等々……

以上に対して、積極的反応になったいくつかの理由も拾ってみると、

#### 〈保育所保育にむく理由〉

“今まで自分で思ってきた子どもの育て方と保育所での指導のしかたが同じだったから”  
 “園の方針みたいなものが私にむいていたから”  
 “子どもと遊んでいて自分も子どもも楽しめたから”  
 “私のいうことを聞いてくれたし、私のことを先生先生と呼んでくれたから”  
 “子どもとうまく話せるか心配だったが、すごく仲よくなれたから”等々……

#### 〈幼稚園教諭にむく理由〉

“2週間一緒にいてお別れする時、本当に泣けてしまい、子どもたちも大変なついでくれたから”  
 “自分にはこの道しかないと思っているし、実際やりがいのある仕事で、自分も楽しかったから”  
 “1日の目標を持って子どもたちを指導していくところが自分の思っていたことに近いから”  
 “体力もいるが保育所ほどいらず、子どものことを考えて行動ができ、毎日が充実していたから”  
 “子どもと過ごして、とても楽しかったから”等々……

以上みられるように積極的理由・消極的理由を問わず幼稚園と保育所とでは記述内容に若干の相違があるように思われる。幼稚園にむくとする者は幼稚園の教育内容的職務に概して肯定的であるのに対し、保育所の母親的・養護内容的職務には否定的傾向を示し、むかないと記述しやすい。保育所にむくとする者は全くその正反対の記述になりやすい。共通する面は実習体験や子どもとの関わり体験が楽しく、成功裡に自分らしさを発揮することができればむくとし、そうでなければむかないとするところであるように思われる。

## ②施設保育への適否

第10表から明らかなように「非常にむく」は皆無「ややむく」は僅かに2人(2.1%)に過ぎなかった。この2名の者があげた理由は

#### 〈施設保育にむく理由〉

“責任のある仕事だと思ったが、入所児と気が合ったのでやっていけるのではないかと思ったから”  
 “やりたいと思ったから”

反対に「あまりむかない」24人(25.5%)「全くむかない」9人(9.6%)を合計すると、33人(35.1%)の者が自分は施設保育にむかないと表明している。その理由をいくつか拾ってみると

#### 〈施設保育にむかない理由〉

“自分の希望している進路と全く違うから”  
 “施設はいろいろなところを見学してきたがとても大変で、その場所によってはいろいろな障害を持っている子どもがいて、あまり近づくことができず、怖いというイメージを持ってしまったから”  
 “施設での実習経験も少ないし、大変な仕事だから”  
 “私には体力的にも少し無理な仕事だと思うから”

“見学に行き、とても大変だということを知り、私なんかではとても務まらないと思うから”  
 “養護施設へ行った時、子どもの接し方で立ち往生してしまったから”

以上にみられるように消極的理由ばかりが多くあげられたが、これはまだ2年生実習を受講していないために、外面的な見学観察実習だけの印象に左右された判断が表面に出てきたとも考えることができる。

「どちらともいえない」26人(27.7%)「わからない」11人(11.7%)無回答22人(23.4%)というように、施設保母としてむいているかどうかの態度表明を明確にしなかった者が59人(62.8%)もいたことがそれを物語っている。ちなみに「どちらともいえない」理由をいくつか拾ってみると

“まだ実習(宿泊実習)をしていないので、よくわからない”  
 “施設の仕事の一部分しか見学していないから”  
 “子どもと直接接していないのでわからない”  
 “いろいろな施設によって、むいているのかむかないのか違うと思うから”

また「よく分からない」理由についてもいくつか拾ってみると

“ただ見学しただけなので、むいているかどうかまだ分からない”  
 “今までこの子たちと接したことがないので、まだ自分がむいているかなどはまだ分からない”  
 “心ではやっていけると思う時もあるし、やっぱり……と思う時もある”

以上のようにやはり宿泊実習が経験されていないために明確な回答を留保している者が少なくないとみられる。

## 6 実習体験と保育職になりたい気持

前節でみてきたように、保育職への適否に及ぼす実習の影響は、必ずしも積極的作用ばかりでなく、場合によっては消極的に作用することが考察された。特に施設実習においては消極的作用ばかりが目立つような回答結果となり、更に検討する必要性が感じられた。ここでは1年生時の実習体験が保育職になりたい気持にどのような変化をもたらすかを検討する。第11表は実習を幼稚園教諭<sup>6)</sup>、保育所実習<sup>7)</sup>、施設実習<sup>8)</sup>に分け、それぞれの実習後になりたい気持がどう変化したかを回答させた結果である。

6) 7) 8) 本学で実施している実習の概要を次表に示す。

- 1年生実習の構成は次のとおりである。  
 教育実習……2週間の幼稚園見学・観察・参加実習  
 保育実習……〔保育所〕3回の見学・観察実習(半日)  
                   〔施設〕5回の見学・観察実習(半日～1日)
- 2年生実習の構成は次のとおりである。  
 教育実習……2週間の幼稚園観察・参加・指導実習  
 保育実習……〔保育所〕2週間の観察・参加・指導実習  
                   〔施設〕1週間の宿泊による観察・参加・指導実習

実 習 概 要

実 習 種 別	単位数	必修・選択	実施学年	実 習 内 容
教員免許状	4	必修	1～2年	1年生 一見学・観察・参加実習 2年生 一観察・参加・指導実習
保母資格	5	必修	1年生	保育所・施設一見学・観察実習
			2年生	保 育 所一観察・参加・指導実習 施 設一観察・参加・指導実習
	2	選択	2年生	参加・指導実習(冬期)
	2	選択	2年生	参加・指導実習(冬期)

第11表 実習体験と専門職になりたい気持

人数 (%)	幼稚園実習	保育所実習	施設実習
ますます強くなった	12(12.8) } 45	17(18.1) } 47	0 } 11
多少は強くなった	33(35.1) } (47.9)	30(31.9) } (50.0)	11(11.7) } (11.7)
変わらない	26(27.7)	19(20.2)	30(31.9)
多少薄れてきた	15(16.0) } 22	15(16.0) } 20	14(14.9) } 24
なりたくなかった	7 (7.4) } (23.4)	5 (5.3) } (21.3)	10(10.6) } (25.5)
その他	1 (1.1)	1 (1.1)	4 (4.3)
無回答	0	7 (7.4)	25(26.6)
計	94	94	94

### (1) 幼稚園実習・保育所実習と保育職になりたい気持

実習後にそれぞれの専門職になりたい気持が「ますます強くなった」「多少は強くなった」と回答した者は幼稚園実習では45人(47.9%)、保育所実習では47人(50.0%)、反対に「多少薄れてきた」「なりたくなかった」と回答した者は前者で22人(23.4%)、後者では20人(21.3%)であった。実習により積極的影響を受けた者がそれぞれ約半数を占め、全体としては学生の保育者志向にプラスに作用したと考えられるがその反面で約20%強にあたる者がそれぞれの保育者志向を弱めている点は注目されよう。そこで実習中のどんな契機が積極的影響をもたらすのかを、記述された理由から分析してみると

#### 〈積極的影響をもたらす契機〉

##### (1) 幼稚園や保育所に対する自分なりの保育観や児童観に基づくイメージや期待感が確かめられたり、満たされたとき

“自分がやりたいと思っていたのと大体同じ感じだったので”  
 “今まで思っていた以上にやりがいがあり、自分にも適していると思ったから”  
 “今まで絶対になりたいと考えていたし、私の思い通りの職場だったと思ったから”等々……

##### (2) 実習中の快体験や達成感が達成されたとき

“実際に子どもたちと接してみて、毎日がとても楽しく感じられ発見することばかりだったから”  
 “実際に子どもたちと接し教師の仕事をやってみて自分でやってみたいという感じを持ったから”  
 “最初は実習がうまくいかないと思っていたが子どもたちがだんだん私に慣れてついてきてくれたから”  
 “実際に子どもたちとかかわってみて、大変やりがいのある仕事だと改めて感じたから”等々……

##### (3) 子どもへの愛情と共感が感じられたとき

“子どもたちがすなおでかわいかったから”  
 “乳児に対してかわいいという気持と子どもたちと一緒に過ごす時間が楽しかったから”  
 “とても子どもたちがのびのびしていて、その中ですごくことを学んでいき、みんな生き生きしていたから”等々……

##### (4) 保育者への共感と同一視が生じたとき

“先生が子どもたちにやさしく接しておられる姿を見て感動したから”  
 “先生をみていて楽しそうでやりがいのある仕事だと思ったから”

“先生方と子どもたちの関係を見てとてもすてきで、子どもたちがすごくのびのびと感じられたから”  
 “実習をやってみて、まだまだ自分の実力が足りないと思ったので、もっと指導してくれた先生のようになりたいたいと思ったから”等々……

以上の4つのカテゴリーにまとめられるように思われる。実習中にこうした体験が生起したときにプラス効果が促進されて保育者志向が強められていくであろうし、反対の体験が生起したときはマイナス効果が促進されて保育者志向が弱められていくであろう。

次にいくつかの消極的事例をあげてみよう。

“思っていたイメージより悪かったから”  
 “子どもの時にしっかりした躰をすることが大切だと思っていたけど、勉強ばかりで教え過ぎではないかと思ったから”  
 “自分にはむいていない仕事だと思ったから”  
 “ピアノがうまく弾けず苦労したから”  
 “初めてだったということもあって、うまく出来ず嫌になってしまったから”  
 “発表会の直前であわただしく、保育内容が時間にふりまわされているようにみえたから”  
 “1日の流れがだらだらしているような感じがしたから”  
 “子どもへの愛情を感じられない先生がいて、保母という仕事への疑問が出てきたから”等々……

## (2) 施設実習と施設保母になりたい気持

実習後に施設保母になりたい気持が「ますます強くなった」とする者は皆無であったが「多少は強くなった」11人（11.7%）「変わらない」30人（31.9%）「多少薄れてきた」14人（14.9%）「なりたくなくなかった」10人（10.6%）という回答結果であった。

まず実習により積極的影響を受けたと思われる11人について、その理由をいくつか拾ってみると、

“多少は福祉の方面に関心が持てるようになったから”  
 “自分たちと違う生活をしていながら一生懸命生きている人達を見て共感したから”  
 “見学施設が家庭のような環境だったので保母の立場よりは母親の立場で子どもたちと接することができると思ったから”  
 “以前は全く考えていなかったけれど大変そうだがやりがいがありそうだし、家族のような温い関係を作ることができそうだから”  
 “施設を見学してこの子たちの力になれたらいいなと思ったから”  
 “福祉施設保母の仕事内容がわかってきたから”等々……

以上の理由にもみられるように積極的影響を受けた者には施設を見学して子どもたちの生活や保母の役割をそれなりに理解し受容する段階が先ずあるように思われる。その段階からこれなら私にだってできそうだという気持や役割感が生まれ、さらに子どもや保母への共感や同一視が生じて、施設保母になりたい気持が強められていくのではないだろうか。

その反対に消極的影響を受けたと思われる24人の者についても、いくつかの理由を拾ってみると、

“別に施設保母になりたいと思わなかったから”  
 “自分の希望している進路と全く違うので”  
 “障害者の身のまわりのことをすべてやることには自信がないから”  
 “思っていたよりもずっと大変だということがわかったから”  
 “老人ホーム、乳児院などいろいろあるが、保育園と違って体力的に大変だと思ったから”  
 “自分の興味があまり湧かないことに気付いたので”等々……

施設保母になりたくなくなった理由として、やはり職務の困難度や過労度を知り、精神的身体的に就労していく自信がないことを挙げる者が最も多かった。また施設にはもともと興味も関心もないから、また希望している進路でもないからといった無関心的無視的理由を挙げる者もかなり見うけられた。

### (3) 保育職になりたい気持と保育職にむくと思う気持

保育職になりたい気持とむくと思う気持は相互に影響しあう関係にあることが今までの分析で明らかになってきた。自分が保育職にむいていると思えば実習にも積極的に参加できるし、実習から受ける影響も大きいものがある。また実習によって保育職になりたい気持が強められた者は自分が保育職にむいていると思う気持をますます強めていくであろう。この2つの意識作用は相互に依存しあいながら、保育者志向行動に影響を及ぼしていると思われる。そこで実習後に保育者になりたい気持が強くなった者と、その反対に弱くなった者を取りあげ、彼女たちが保育者への適否について、自分をどう認知しているかを集計してみると第12表のようになる。

第12表 保育職になりたい気持とむく気持

実習後、保育職 になりたい気持	幼稚園教諭への適否			保育所保母への適否			施設保母への適否		
	む	く	どちらとも むかない	む	く	どちらとも むかない	む	く	どちらとも むかない
強くなった	29	11	1	29	13	1	2	6	1
弱くなった	2	7	11	0	7	11	0	5	17
計	31	18	12	29	20	13	2	11	18

実習後保育職になりたい気持が強くなった者は自己の適否をむくと認知しており、なりたくなくなった者はむかないと認知している者が明らかに多い。特に幼稚園教諭と保育所保母への適否においてその傾向が顕著である。施設保母においてはなりたくなくなった者とむかないと認知している者との間に一義的關係がみられ、施設保母になりたくなくなった者は自己を施設保母にむかないと認知する者が明らかに多い。

以上から、実習効果をより高めていくためには自分が保育者にむいていると認知する学生がより多くなることが期待される。

## 7 1年後における卒業後の希望進路とその理由

入学時における卒業後の希望進路とその理由については、すでにⅢの3で考察したが、われわれは1年後の今回のアンケートにおいても卒業後の希望進路を尋ねた。特に今回はその進路が入学当初の進路と比べて変化しているかどうか、更に変化したと回答した者については、どのような進路からどのような進路に変化したのか、また変化したその理由や原因についても自由記述するよう求めた。

第13表・第14表・第15表はそれぞれの結果を示す。

第 13 表 入学時と 1 年後の卒業後の希望進路の比較

自由記述		人数 (%)	入学時	1 年後
専門職	幼稚園	41(41.0)	84 (84.0)	24(25.5)
	保育所	28(28.0)		42(44.7)
	施設	5 (5.0)		5 (5.3)
	まだ固まっていないが専門職	10(10.0)		0
非専門職	一般公務員	1 (1.0)	10 (10.0)	5 (5.3)
	一般企業	5 (5.0)		7 (7.5)
	その他の職種	2 (2.0)		4 (4.3)
	進学	2 (2.0)		2 (2.1)
未定			6(6.0)	5(5.3)
計			100	94

第 14 表 卒業後の希望進路の変化

卒業後の進路変化の有無	人数 (%)
変化していない	64(68.1)
変化した	少し 19(20.2)
	かなり 6 (6.4)
	はっきり 5 (5.3)
計	94

第 15 表 希望進路変更者 (30 人) の変化の方向

専門職志向 (19人)	専門職から専門職への変化	非専門職志向 (8人)	専門職から非専門職への変化
	幼 (4) } → 保 (5)		保 (2) } → 企 (5)
	施 (1) } → 保 (5)		幼 (3) } → 企 (5)
	保 (2) → 幼 (2)		保 (2) } → 他 (3)
	保 (2) → 施 (2)		幼 (1) }
	非専門職から専門職へ変化		
	企 (1) } → 保 (2)		
	進 (1) }		
	企 (3) } → 幼 (4)	専門職から未定へ変化	
	進 (1) }	幼 (2) → 未 (2)	
企 (1) → 施 (1)	非専門職から未定へ変化		
未定から専門職への変化	進 (1) → 未 (1)		
未 (2) → 保 (2)			
未 (1) → 幼 (1)			
	未定志向 (3人)		

先ず最初に第 13 表から入学時と 1 年後の希望進路を比較すると、保育所へ就職したい者と幼稚園へ就職したい者の比率が入学時と 1 年後とでは完全に逆転していることがわかる。入学時には幼稚園就職希望者が 41 人 (41.0%) であったが 1 年後には 24 人 (25.5%) に減少し、代わって保育所就職希望者が入学時 28 人 (28.0%) であったものが 1 年後には 42 人 (44.7%) と増加している。一方、施設就職希望者にはほとんど増減がみられなかった。また入学時には専門職に就職したいがまだ未定の者が 10 人 (10.0%) もいたが、今回の調査では皆無であった。したがって専門職就職希望者は合計すると入学時は 84 人 (84.0%) を数えたが今回は 71 人 (75.5%) と僅かながら減少している。そして非専門職就職希望者が 10 人 (10.0%) から 18 人 (19.2%) と微増している。最後の未定者にはほとんど増減はみられなかった。

次に現在のあなたの希望進路は入学時と比較して変化しているかどうかを第 14 表でみると、「変化していない」が最も多く 64 人 (68.1%) であった。残りの 30 人 (31.9%) の者は大なり小なり進路を変更したと回答している。その変化の方向を第 15 表でみると、専門職から専門職へ変化した者 9 人、非専門職から専門職へ変化した者 7 人、未定から専門職へ変化したもの 3 人、専門職から非専門職へ変化した者 8 人、専門職から未定へ変化した者 2 人、非専門職から未定へ変化した者 1 人という内訳であった。

以上の結果から相当数の者が入学当初の希望進路を変更させており、特に幼稚園教諭希望から保育所保母希望へ変化したと思われる者が 10 数名出たことが注目される。変化の方向も専門職

から専門職という方向だけでなく、さまざまな方向へ変動している。これらの進路変更者の変更理由をみると、

#### 〈専門職から専門職への変化した理由〉

該当する9人のうち幼稚園と保育所間を移動した者は

“両方の実習に行ってみて保育所（または幼稚園）の方が自分に合っていると思ったから”（保⇄幼）

といった理由を述べて、より自分に合った職種へ変更している者が大部分であった。しかし中には、

“給料の問題、公立保育は公務員として生活が安定しているから”（幼→保）

“保育所には延長保育があるので、毎日きまった生活ができないが、幼稚園の方は時間がきまった保育なので”（保→幼）

といった現実的な理由も認められた。また施設希望から保育所希望に変化した1名の者は

“思った以上に大変な仕事だと気づき自信をなくしたから”（施→保）

と回答している。その一方で保育所希望から施設希望に変化した2名の者は

“福祉の面で自分が他人に役立つことが少しでもできればいいと思ったから”（保→施）

といった積極的理由が述べられた。

#### 〈非専門職から専門職へ変化した理由〉

該当する7人が記述した理由は

“1年間勉強し実習も経験した結果、自分にむいているかよく分からないけど、やってみたくなくなったし、興味もあつたから、進学するのは無理と感じたから”（進→幼）

“普通の企業に入りたかったけど、実習に行きとても楽しかったから”（企→幼）

“折角勉強して資格をとるのだから、それを生かせる仕事の方がよいと思ったから”（企→幼）

というように積極的理由が述べられていた。1事例ではあつたが、次に示すような消極的理由で志望変更した者もみうけられた。

“幼稚園の先生にもあまりむいていないと思うけど、企業の就職がとても厳しいと聞いているから”（企→幼）

#### 〈未定から専門職へ変化した理由〉

“子ども関係の仕事ならどこでもいいと思っていたけれど、保育所保育がいいと思い始めたから”（未→保）

“変化したわけではないけど自分に一番合っているところが具体化したから”（未→保）

“入学当初は幼稚園の先生かエレクトーン講師かで迷っていたが、今は幼稚園の先生になることにしたから”（未→幼）

以上の3事例は未定とはいうものの、もともと専門職志向者であったことを物語っている。

#### 〈専門職から非専門職へ変化した理由〉

該当者8人のうち企業希望に変化した5人の記述をみると

“保育職が自分にむいていないような気がするから”（保→企）

“一般企業の方にかなり興味がわいてきたから”（保→企）

“2週間の実習で仕事の大変さ、責任の重大さがわかり、自分にはできないと感じたから”（幼→企）

などとその理由を述べている。また「その他の職種」に志望変更した3人は、託児所希望2名、リトミック講師希望1名という内訳であり、それぞれ変更理由を次のように記述している。

“実習に行って保育所や幼稚園の担任の大変さがわかり大きな組織でない、比較的気楽につとめられるような託児所保母のような仕事がしてみたくなったから”（保→その他）

“授業や実習などで保育の大変さがわかり自分にできるか不安に思ったため、でも子どもと接する仕事はしたいから”（幼→その他）

“リトミック教室で教えたいと思っているから”（保→その他）

#### 〈専門職から未定に変化した理由〉

該当の2人の者の回答は次のとおりである。

“いろいろと実習に行ってみて、どれが自分に一番合っているかで迷っているから”（幼→未）

“実習で体験した先生の仕事をしてみたいけれど、一般企業でも自分のやりたい仕事があるので迷っている”（幼→未）

#### 〈非専門職（進学）から未定に変化した理由〉

僅か1事例であったが、次のように記述している。

“今、就職か進学かで、どちらにしようかと考えているが、お金の問題で迷っている”（進→未）

以上にみられるように入学当初と比べて卒業後の希望進路が変化すると回答した30名の者の変化の方向ならびにその理由はさまざまであるが、保育所保母希望者と幼稚園教諭希望者という視点から変化の数値を眺めてみると両者に殆んど増減がないことに気づく。まず保育所についてみると（第15表参照）新たに保育所保母希望になった者9人、保育所保母希望から他志向へ転じた者8人で差引き1人の増であり、また、幼稚園についてみると新たに幼稚園教諭希望になった者7人、幼稚園教諭希望から他志向へ転じた者10人で差引き3人の減である。しかし第14表で考察したように入学時と1年後では両者の希望者数は逆転し保育所保母希望者は14人の増、また幼稚園教諭希望者は17人の減となっており上述の数値と合致しない。

これについて、われわれは現在の希望進路が入学当初の希望進路と同じで少しも変化していないと回答した64名の者のうち、専門職希望を表明した51名の者が果して本当に変化していないのかを検討してみた。第16表は51名の者が変化していないとした今回の専門職の進路の内訳と検討した結果、今回の進路は変更進路であることが判明した不一致者数を示す。

第16表 進路変更が判明した不一致者数

1年後の進路	人数	不一致者数
幼稚園教諭	16	3
保育所保母	35	16
計	51	19

51人中19名の者に不一致がみられた。特に今回の調査で保育所保母希望を表明した35人のうち14名の者は実は入学時に「幼稚園に就職したい」を選択していることが判明した。この14人を幼稚園から保育所への進路変更者に組み入ると数値上のつじつまは合ってくる。しかしなぜ彼女たちは今回表明した進路を入学当初と少しも変化していない進路であると回答したのだろうかという疑問は残る。これについてわれわれは次のように解釈している。①入学当初のアンケートにどのような進路を回答したかを忘れてしまった者がいるのではないかと、②しかし最大の理由は、学生たちの入学当初の意識の中には幼稚園も保育所も心情的には同じレベルのものと

して把えられており、強いて選択を求められたから幼稚園または保育所と回答したに過ぎなかったのではないかということである。つまり入学当初に表明された進路は極めて変動性の高い一選択肢であって確固とした意志表明の結果ではなかったということであろう。

いずれにしても当初幼稚園を希望した者の中から相当数の者が1年後には保育所を志望するようになってきていることが明らかである。このようなパターンは本学科のここ2・3年来の特徴でもあるが、今回はその傾向が強く現われているように思われる。

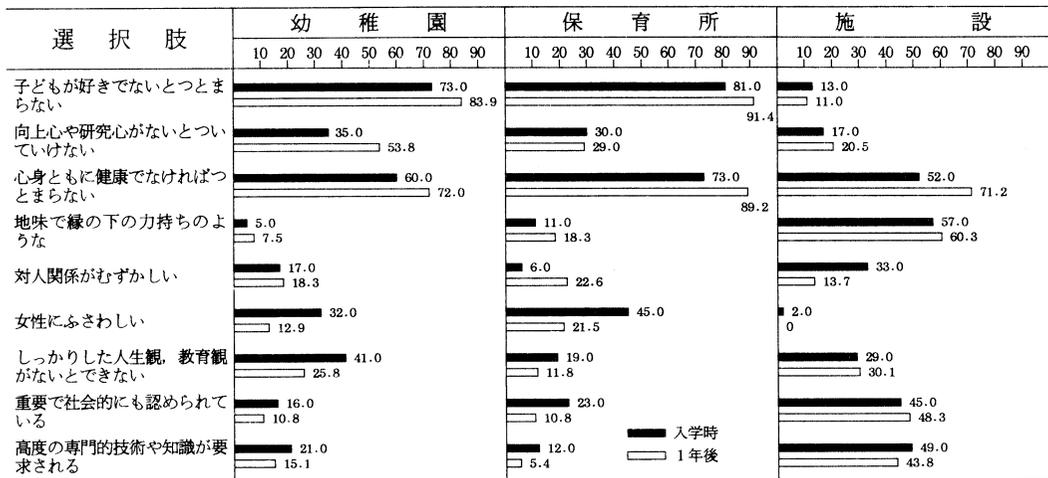
## 8 入学時と1年後における保育職のとらえ方・保育者の資質

### (1) 保育職のとらえ方

幼稚園、保育所、施設の保育職に対して学生たちはどのようなとらえ方をしているかを明らかにするため、9選択肢からふさわしいものを3つ選択させた。入学時の調査では選択の強い順に記入させ、1年後の今回の調査では実習体験を加味させるような設問をした以外は全く同じ手続きで行った。第1図はその結果である。数値は頻度数を回答者数で除した%である。

### 〈幼稚園と保育所の保育職に対するとらえ方〉

第1図 幼稚園・保育所・施設に対するイメージ



先ず入学時における幼稚園と保育所の保育職についてみると上位2項目は両者全く同じ項目がほぼ同じ比率で選ばれており、1位「子どもが好きでないとつとまらない」、2位「心身ともに健康でなければつとまらない」である。しかし第3位に選ばれた項目は微妙に異なり、幼稚園は「しっかりした人生観・教育観がないとできない」であり、保育所は「女性にふさわしい」である。つまり両者の差異は幼稚園がしっかりと人生観や教育観を必要とする仕事であり、保育所は女性にふさわしい仕事であると認識されている点である。しかしそうした差異も1年後の今回の調査では「子ども好き」と「心身ともに健康」が前回より一層多く選択されてくるため相殺されて、上位3項目は全く同じ項目となる。つまり幼稚園も保育所も「子ども好き」で「心身ともに健康」で「向上心や研究心」がないとつとまらない仕事であると認識されるようになる。また保育所の「女性にふさわしい仕事」が前は45.0%であったが、実習を体験している今回の調査では21.5%と半減し、「対人関係のむずかしい仕事」が6.0%が22.6%に急増している点が注目される。こ

これは保育実習を経験した学生たちの体験が反映された結果と解釈される。

### 〈施設保育職のとらえ方〉

一方、施設に対するとらえ方は幼稚園・保育所とは明らかに異なる。第2位に選ばれた「心身ともに健康でなければつとまらない仕事」であることに変わりはないが、1位に「地味で縁の下の力持ちのような」が選ばれ、「高度の専門的技術や知識」「重要で社会的に認められている」の2項目が3・4位に位置づけられている。1年後の今回の調査でも全く同様な順位の選択結果であった。つまり施設は「地味で縁の下の力持ち」のような仕事であり、しかも「高度な技術や知識」を必要とし、「社会的にも認められている」仕事であると認識されており、幼稚園・保育所とはつきり一線が画かれている。総じて1年後の今回の調査では上位項目が前回は上まわり、下位項目が前回は下まわって選択されていることに気づく。こうした両極端化現象は学生たちが1年間の学習や実習を通して、しだいに保育現場の実態や実情を理解してきたときに起こり易い反応であると考えられる。

### (2) 保育者の資質

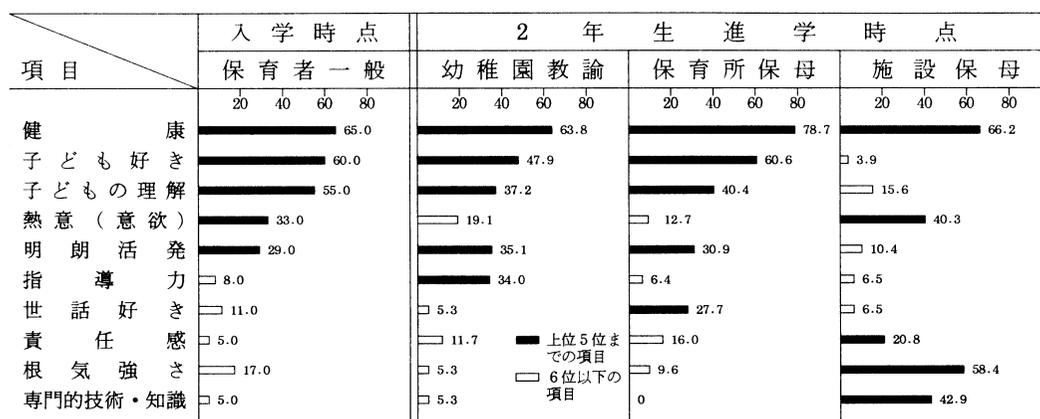
保育者の資質についても保育職のとらえ方と同様な処理を行って、幼稚園教諭、保育所保母、施設保母の3者間の比較を試みた。ただし入学時の調査では、幼稚園・保育所・施設というように区分せず保育者一般に求められる資質の必要度を回答させたので、先ずその結果からみていく。

16項目の資質の中から必要と思われるものをその順序にしたがって5項目選択させたが、ここでは上位3項目までの選択に限定して結果をまとめた。最も多く選ばれた項目は1位「健康」65.0%、2位「子ども好き」60.0%、3位「子どもの理解」55.0%であった。ついで「熱意(意欲)」33.0%「明朗活発」29.0%と続いた。

以上の選択結果が1年後の今回の調査においてはどのように推移するのだろうか。第2図は前回と今回の結果を比較したものであり、■は上位5位までの項目を示す。

### 〈幼稚園教諭と保育所保母に必要な資質〉

第2図 保育者(幼稚園教諭・保育所保母・施設保母)の資質の重要度



先ず幼稚園教諭と保育所保母についてみると、両者間に差異は認められず1位「健康」2位「子ども好き」3位「子どもの理解」4位「明朗活発」という順序で同じ項目が選ばれており、入学

時での保育者一般で選ばれた項目とも全く同じであった。しかし入学時に第4位に選ばれた「熱意(意欲)」が今回の調査では上位5位内から姿を消し、代わって幼稚園では「指導力」、保育所では「世話好き」が選択されている。前節の入学時における保育職のとらえ方において幼稚園教諭はしっかりした人生観や教育観がなければできない仕事であり、保育所保母は女性にふさわしい仕事である点が両者の僅かな差異として認識されたが、この僅かの差異がこの調査でも幼稚園の「指導力」、保育所の「世話好き」という選択結果となって現われてきていると考えられる。つまり幼稚園教諭・保育所保母にとって必要な資質は1位「健康」2位「子ども好き」3位「子どもの理解」4位「明朗活発」であり、第5位に幼稚園教諭では「指導力」保育所保母では「世話好き」であると認識されている点が両者の微妙な差異と考えられる。

### 〈施設保母に必要な資質〉

次に施設保母に目を転じてみると、1位「健康」は当然として、2位「根気強さ」3位「専門的技術・知識」4位「熱意(意欲)」5位「責任感」と続いており、明らかに幼稚園教諭・保育所保母と異なる資質が選ばれている。前節で考察したように施設保育職のとらえ方の分析において、縁の下の力持ちのような、それでいて高度の専門的技術と知識が要求され、社会的にも認められている重要な仕事・職場が施設であるという認識と一致するような資質が選ばれており、保育職のとらえ方と保育者の資質は関連度の高い意識であることが理解できる。

## 9 卒業時点における内定進路

卒業を間近に控えた平成6年2月時点においてわれわれは第3回目のアンケートを行った。その時点における就職先の内定状況を先ず質問し、ついで内定者には、(1)内定先の名称と職種(2)何回目の挑戦(就職試験)で内定したか(3)その内定職場(職種)は入学当初から希望していた職場かどうかを尋ねた。そしてその内定職場(職種)が入学当初の希望と異なった職場(職種)であると回答した者には、なぜ違った職場になってしまったかについて、その理由や経緯を自由記述させた。さらに内定職場(職種)に対する満足度ならびに意欲(自信)の程度をそれぞれ5件法<sup>9)</sup>で評定させた。

第17表 就職内定状況

選 択 肢	人 数 (%)
内定している	88(88.0)
内定していない	6 (6.0)
そ の 他	6 (6.0)
計	100

第17表は就職先の内定状況を示す。これによると、この時点で「すでに内定している」88人(88.0%)「まだ内定していない」6人(6.0%)、「その他」6人(6.0%)という回答結果であった。最後の「その他」の6人は就職しないことを表明した者で、進学1、家事手伝い2、フリーアルバイター2、結婚予定1という内訳であった。

一方、内定していると回答した88人の就職先の内訳は第18表に示すように、

9) 5件法 満足度(1.大変満足 2.やや満足 3.ふつう 4.やや不満 5.大変不満)

意欲・自信度(1.十分にやっつけそう 2.なんとかやっつけそう 3.どちらともいえない 4.やや不安 5.とても不安)

第 18 表 内定者の就職進路

職 場 ・ 職 種		人 数 (%)	
専 門 職	幼 稚 園 教 諭	32(36.4)	} 75 (85.2)
	保 育 所 保 母	34(38.6)	
	施 設 保 母	9(10.2)	
非 専 門 職	一 般 企 業 会 社 員	11(12.5)	} 13 (14.8)
	公 務 員	2 (2.3)	
計		88	

幼稚園教諭 32 名, 保育所保育母 34 名, 施設保育母 (介護職を含む) 9 名の計 75 名が専門職であり, 一般企業・会社員等 11 名, 公務員 2 名の計 13 名が非専門職であった。したがってこの時点における専門職就職 (内定) 率は卒業生 100 名中 75 名 (75.0%) であった。

これらの内定者のうち, 1 回目の採用試験で内定した者は 47 名 (53.4%) 2 回目の試験で内定した者は 24 名 (27.3%) 3 回目以上を必要とした者 13 名 (14.8%) であった。最も多くの試験を必要とした者の回数は 5 回というケースもあり, 大変厳しい就職事情が反映されたことをうかがわせた。

#### (1) 進路変更者の事例分析

第 19 表に示すように卒業時に内定した職場 (職種) が入学当初からの希望職場 (職種) であると回答した者は 59 人<sup>10)</sup> (67.0%) であり, 異なった職場 (職種) であると回答した者は 25 人 (28.4%) であった。

第 19 表 内定進路と当初希望進路との一致度

選 択 肢	人数 (%)
当初から希望していた職場 (職種)	59(67.0)
そ の 他	25(28.4)
計	4 (4.5)
当初の希望とは違った職場 (職種)	88

つまり約 30%に近い学生は, 入学当初の希望職場や職種と異なった職場や職種に内定したとしている。なぜそのような職場 (職種) に内定してしまったかについて学生たちが自由記述した変化の方向や理由をまとめてみると第 20 表のようになる。

10) 内定職場が入学当初からの希望職場であると回答した者は 59 人 (67.0%) であったが, この回答には回答者による思い違いの回答が相当数含まれており, 実数はこれよりもかなり下まわった数値となる。相対的に異なった職場であると回答した 25 人 (28.4%) の実数も, この数値よりもかなり上まわった数値となる。

第20表 入学当初の希望進路と違ってしまった職場・職種に内定した25人の理由

ケース ナンバー	入学当初 の希望	2年進学 時の希望	内定 就職先	入学当初に希望していた職場・職種と違ってしまった理由
1	幼	→ 保	→ 施	1年生の終り頃から施設実習を受け、気持ちが施設へ変わってきたから。
2	保	→ 企	→ 企	保母は私にむいていないと思ったから。
3	幼	→ 未	→ 医事	初めは専門職でしたが医療事務のバイトの仕事にしだいに興味が湧き、その職場からも勧められたから。
4	未	→ 公	→ 保	よくわかりません。
5	保	→ 施	→ 施	初めは保育所希望でしたが、介護の仕事に興味を持つようになり希望が変わりました。
6	企	→ 企	→ 企	希望する職種（ホテル業）の会社に合格できなかったため、第2希望の職種に変更した。
7	幼	→ 保	→ 幼	公立の教育保育職に落ちたから。
8	幼	→ 保	→ 病託	最初は保育所がよかったけれど不合格で、幼稚園も不合格で、とにかく子ども関係の仕事をしたかったため。
9	幼	→ 企	→ 企	今年は就職がすごくむずかしいし、卸売りの仕事はやりたかったし勉強したかったため、最初の幼稚園から気持ちが変わった。
10	幼	→ 保	→ 幼	市の保育協会の試験に落ちてしまったから。
11	企	→ 幼	→ 幼	不景気で企業就職がむずかしいから、自分の気持ちも変わっていったから。
12	専	→ 幼	→ 保	地元を希望していたのに、今年は採用がなかったため。
13	幼	→ 保	→ 幼	第1希望の市の保育協会が不合格だったため。
14	保	→ 保	→ 幼	保育所に最初は行きたかったが、幼稚園になってしまったため。
15	専	→ 保	→ 施	入学当初より特に専門職に就きたいという希望ではなくて、どちらかといえば施設関係の仕事に就きたかったため。
16	施	→ 幼	→ 保	2年間勉強してきて、自分の可能性を試してみたかったから。
17	保	→ 幼	→ 幼	保育所に入りたかったけれど、幼稚園になってしまったため。
18	保	→ 保	→ 幼	公立の保育職になりたかったが、今年は市の採用試験がないということで急ぎよ幼稚園を受けた。
19	保	→ 保	→ 企	専門職になりたかったが、実習や勉強を重ねるうちに、自分に適していないと思うようになったから。
20	幼	→ 公	→ 医事	公務員になりたかったが、不合格だったため。
21	未	→ 施	→ 保	最初は一般企業への希望でしたが実習をしていくうちに専門職への希望へ変わっていった。
22	施	→ 保	→ 幼	市の保育協会の試験に落ちてしまったから。
23	保	→ 施	→ 幼	希望の職場（公立保母職）の就職試験に合格できなかったため。
24	保	→ 企	→ 施	最初は企業に就職しようと思っていたのですが、実習を体験してみて自分には施設の方が合っていると思ったため。
25	未	→ 未	→ 企	気が変わった。

注 幼……幼稚園教諭 保……保育所保母 施……施設保母（介護職を含む） 専……専門職（幼，保，施を含む）  
公……一般公務員 医事……医療事務 病託……病院託児 企……一般企業 未……未定

進路変化の方向を矢印で示すが、専門職種から他の専門職種への小さな変化もあれば、一般企業から施設保母へといったより大きな変化もみられる。ケースによっては調査時点毎に進路が2転3転しているような目まぐるしい変化も散見される。学生たちはこうした進路変化に至った理由を記述しているが、記述された簡単な内容<sup>11)</sup> だけからでは変化のプロセスは浮かびあがってこない。選択行動の終着点でもある内定職場（職種）は学生たちの主体的な選択行動の結果なのか、それとも余儀なき選択行動の結果なのか、どんな意識や志向が働いて進路変更がなされたのか、また内定職場（職種）に対してどの程度の満足感と意欲を持っているのか等々についても明らかにしていきたい。したがって、ここではやや冗長になるけれどもいくつか事例をとりあげて意識や志向の変化のプロセスを縦断的に分析し、内定に至ったケースの状態像を明らかにする。

11) 内定に至った経緯についてはできるだけ詳しく自由記述するように求めたが、第20表に示すような簡単な経緯内容が記述されたに過ぎなかった。

### ケース 22（施→保→幼）内定理由 “市の保育協会の試験に落ちてしまったから。”

〔概要〕事例 22 は入学当初、「施設に就職したい」を選択し、その理由として「家の近くに施設があって友人がそこに入っているの遊びに行ったりして、この子たちが本当に愛情に飢えているのだなと知り、何とか私にできることはないかと思うようになったから」と記述している。しかし 2 年生進学時には「入学当初の希望が少し変化してしまった」と回答して、保育所希望を表明するようになる。その理由として“乳児のめんどうがみたくなかったから”と述べて、施設をとりやめたことには直接触れていない。卒業時には準公立の保育所保母統一試験を受け失敗した後、幼稚園にきり変え内定している。内定職場への満足度は「ふつう」、職場への意欲は「なんとかやっけていけそう」を選択し、その理由として“子どもたちをみていると楽しいし、人間関係もよさそうな職場だから”と記述している。

### ケース 23（保→施→幼）内定理由 “希望の職場（公立保母職）の就職試験に、合格できなかったため。”

〔概要〕事例 23 は 2 年生進学時に保育所希望から施設へ進路変更しているが、その理由は“介護福祉士という国家資格があり、短大卒業後、専門学校で修得できるということを知ったので”と記述し、その方面へ就職、又は進学することを示唆している。しかしその志望は卒業時に 3 転し、再び入学当初の希望職種であった保育所希望となり、公立保母採用試験を受験しているが不合格となる。その後、幼稚園に切り変え内定に至っているケースである。

〔解説〕事例 22・23 とも保育者志向に一貫性を欠くケースである。事例 22 は入学当初における施設への傾斜がその後どのような心境で中断されていったかについては何も語っていない。ただ非常に子ども好きで“子どもをみているとつい声をかけてしまうし、すぐ仲よくできる”“乳児さんの世話をするととても楽しかった”などの記述がみられる。また保育所実習を経験して保育所保母になりたい気持ちが強くなったと回答している。このあたりの保育所への志望の傾斜が志望変更の 1 つの契機になったとみられる。

また、事例 23 は入学当初、「保育所に就職したい」を選択しているが、その理由の中で“大きな病院の中にある託児所のようなところに就職したい”と記述している。入学早々託児所希望は稀少反応の 1 つとして注目される。また自己の保育者への適否について“子どもはなぜか好きな方だけど、あまり子どもと接する機会がないので”と理由を述べて「どちらともいえない」を選んでいるが、この表現はうがった見方をすれば自分は子ども好きではないことの逆説的表現であると解釈することもできよう。何れにしても態度が不明瞭で希望が 2 転 3 転し志向に一貫性がみられない。内定職場に対する満足度は「ふつう」と回答し、職場への意欲は「何とかやっけていけそう」を選んでいるが“4 月になったらすぐ担任を持つので不安だけど今まで勉強してきたことを精一杯活用して頑張ってみたい”と結んでいる。

### ケース 8（幼→保→病託）内定理由 “最初は保育所がよかったけれど不合格で、幼稚園も不合格で、とにかく子ども関係の仕事がしたかったので”

〔概要〕事例 8 は施設を除く保育職関係の就職試験に合計 5 回挑戦し、5 回目に病院託児の職に内定したというケースである。入学時は幼稚園希望であったが 2 年生進学時に保育所へ志望を変更している。しかしその変化を意識していない。自己の適否については「どちらともいえない」であり、実習後のなりたい気持ちは「多少強くなった」を選んでいるが、幼稚園と保育所に対して全く同質の反応であった。しかし施設に対しては一線を画し“失礼だけど怖いというイメージが多くやっけていけないと思った”と述べ施設保母にはむかないと回答している。

幼稚園・保育所の保育職への自信の有無については“子どもが好きでえらい仕事だと思うけど、頑張っていけそうな気がする”と全く同じ文章で回答している。卒業時には保育所を手始めにあちこちの専門職試験を受け、5 回目に内定した病院託児の職場に対して「大変満足」だと回答しており“小人数の子ども相手の職場だけれど、やりがいのある仕事につけたから”なんとかやっけていけると意欲のほどを示している。

〔解説〕“とにかく子ども関係の仕事をしたかったから”ということばに象徴されるように、施設を除く専門職場への就職を強く求めたケースである。計 4 回の受験失敗にもめげず、5 回目にして漸く病院託児という保育職を内定させているが、その背景には実習を体験し、幼稚園実習に対しては、“保育の活動で教えることが多く、やりが

いがあるなと思った”，また保育所実習に対しては“乳児が好きで年長さんに比べて大変だけど，成長が早いのですごく一緒に保育をやりたいなと思った”とそれぞれの保育職になりたい気持を強めた経緯があるからと考えられる．型式上は入学当初の幼稚園から保育所への進路変更者とみなされるが，ケースの心情としては幼稚園でも保育所でも可という専門職志向であり，不合格を重ねるにつれてその傾向が加速されていったとみられる．

#### ケース 14 (保→保→幼) 内定理由 “保育所に最初行きかけたが，幼稚園になってしまったため。”

〔概要〕事例 14 は当初から一貫して保育所希望であり自己を保育者に「非常にむく」とし，実習後の保育者になりたい気持も「ますます強くなった」と積極的に回答している．その固かった保育所保育母への就職受験をあきらめて幼稚園教諭に早々と内定している．その理由は実習園（幼稚園）での就職試験が早い時期に行われ，その園に合格してしまったという経緯があるからである．しかしその内定幼稚園に対しては「大変満足」しており「園長先生始め諸先生が実習中にとってもやさしくしてくれたから」という理由を述べて「十分にやっつけよう」と回答している．

#### ケース 17 (保→幼→幼) 内定理由 “保育所へ入りたかったけれど，幼稚園になってしまったため”

〔概要〕事例 17 は 2 年生進学時点で，当初の保育所希望から幼稚園希望へ進路変更をしている．変更理由として“保育所は自分に務まるか不安だし，自信もなくなってきたし休みが少ないのも原因の 1 つ”と記述している．また実習後のなりたい気持は，保育所に対しては“思った以上に大変だったから”と述べて志向度は弱めているが，幼稚園に対しては“思ったとおりの程度だったので気持は変わらない”として幼稚園への志向度を強めている．しかし卒業時になると再び保育所希望に転じ公立保育職採用試験を受験している．受験に失敗した後は幼稚園に切り換え，内定したというケースである．内定職場に対する満足度は「ふつう」と回答し，仕事への意欲は“ピアノの厳しい園だから少し心配”と表明して「やっつけるともいけないとも，どちらともいえない」に回答している．

〔解説〕事例 14・17 はいずれも全く同じ内定理由を述べており，内定先も第 2 志望の幼稚園になってしまったという点で同質のケースとみられる．しかし保育者への意識や志向の様相はかなり異なっている．

事例 14 は保育所保育母に就職するという初志を貫徹することができなかったけれども，最後まで初志を変えなかったという意味で初志堅持型ケースといえるが，“私のことを先生，先生とってくれたし，とても子どもたちがかわいかったから”と述べて実習後の保育職になりたい気持をますます強めている．幼稚園に対しては保育所ほどの傾斜を示さなかったが，実習後のなりたい気持は多少は強くなったとしており，終始第 2 希望就職先として位置づけられている．卒業時になって実習園であった幼稚園からの声かけもあり，応募し内定をみるに至ったのは止む得ない成り行きであったとみることができる．

事例 17 は当初の保育所希望から幼稚園希望に進路を変更させているが，それなりの理由が述べられており，卒業時点では幼稚園就職希望者であるとみなされていた．しかし，他園に先立って行われる公立保育職採用試験をあえて受験し，“保育所に入りたかったけど幼稚園になってしまった”という経緯をたどったケースである．公立保育職への受験はいわゆる「腕だめし」の意味で受験する者も多いので，そのあたりが 1 つの進路変更の契機になったとみられる．それにしても保育職への志向に一貫性がなく，記述内容からみて保育者意識も現実的段階にとどまっているように思われるケースである．

#### ケース 5 (保→施→施) 内定理由 “初めは保育所希望でしたが，介護の仕事に興味を持つようになり希望が変わりました。”

〔概要〕事例 5 は当初「保育所に就職したい」を選んでいるが，“まだよく考えていないので保育所か幼稚園かどちらかにしたい”とはっきりしない気持も表明している．しかし 2 年生進学時には施設へ進路変更し“福祉の面で自分が他人の役に立つところが少しでもあればいいと思って”と理由をあげている．保育職への自己の適否については“大事な仕事なので好きだけでは務まらないし，施設実習に行ってみないとよくわからないから”と記述し，“どちらともいえない”を選んでいる．実習後のなりたい気持では幼稚園教諭・保育所保育母への志向を弱め，

施設保母への志向を「多少は強くなった」と回答し、「いろいろな施設を見学して自分が少しでも役に立てることがあるならと思ったから」とその気持を表明している。卒業時には第1回の受験で介護職に内定し、内定に至った理由として「初めは保育所希望でしたが介護の仕事に興味を持つようになり、希望が変わりました」と述べている。内定職場に対しては「ふつう」の満足度であるとし「介護の仕事は大変だと思うし夜勤もあるから」と述べて、仕事への意欲や自信については「どちらともいえない」と回答している。

### ケース 24（保→企→施）内定理由 “初めは一般企業に就職しようと思っていたのですが、実習を体験してみて自分には施設の方が合っていると思ったから”

〔概要〕事例 24 も当初は保育所希望であり、「前々から望んでいた職場だから」がその理由である。しかし2年生進学時には一転して企業希望を表明する。「子どもの面倒をきちんとみることができると、とても不安だから」がその変更理由である。その時点における施設保母への反応は「1週間ぐらいなら世話できるかも知れないが、何か月も続けていく自信が全くないから」と述べて、自分は施設保母には「あまりむかない」と回答している。また実習後のなりたい気持についても「施設はやりがいのある仕事だと思うけど、あまりにも大変そうだから」と述べて「多少薄れてきた」としている。しかし卒業時には否定的とみられていた施設を第1回目の受験で合格し施設保母に内定している。内定理由は上述にあるように「実習を体験してみて自分には一般企業よりも施設の方が合っていると思ったから」と述べている。内定職場に対して「やや満足」とし「職場の雰囲気はまだよく知っていないから」と記述しながらも「なんとかやっていけそう」な職場だと回答している。

〔解説〕事例 5 も 24 も施設に内定したケースであるが、事例 5 は2年生進学時点で保育所から施設希望へ変化し、以後卒業までその希望を継続しているのに対し、事例 24 は2年生進学時点で保育所から一般企業へ進路変更し、就職時点で再び企業から施設へ進路変更している。この経緯の違いからもわかるように、事例 5 の施設への転機は「自分が少しでも役に立てることがあるなら」と述べているように施設実習を体験して自分なりの役割が施設にあることを見出したからと思われる。一方、就職時期になって企業から施設へ進路変更している事例 24 には実習以外の他のいろいろな要因が絡んでいるのではなかろうか。2年生進学時点で表明された施設への否定的意識がその後の施設実習の体験によって消失したというような具体的内容については何も語られていないので断定はできないが「自分には企業よりも施設の方が合っている」という表明の背後には多くの問題が潜んでいるように思われるからである。

### (2) 進路変更がなかった者の事例分析

入学当初からの希望を変更せず、希望通りの進路に内定していった者からも代表的事例をとりあげて簡単な分析を試みてみよう。

#### 〈幼稚園内定ケース〉ケース A（幼→幼→幼）

〔概要〕事例 A は「私は幼稚園でも保育所でもどちらでもいいけれど、幼稚園教諭というのに強くひかれていたから」と理由をあげて、入学時から幼稚園への就職を強く希望しているケースである。その仕事を「生涯の仕事として続けたい」と回答しており、さらに自分は保育者に「非常にむいている」理由として「この道に好きで進んだのだし、子どもをあやしたりするのは慣れているから、そして、ただ子ども好きというだけでなく、子どもに楽しい場所という毎日を送らせてあげたいと思っているから」と記述し、強い自信を示している。

2年生進学時においてもその進路に変化はなく、実習後の自分は「非常にむいている」と思うようになった理由として「2週間一緒にいてお別れする時、本当に淋しく泣けてしまい、子どもたちもとてもなついてくれたから」とその心境を記述している。しかし、保育所保母への適否については「むかむかないかどちらともいえない」であり、また施設保母に対しては「大変すぎて自信がない」から「全くむいていないと思うようになった」を選んでいる。一方、実習後の幼稚園教諭になりたい気持は「ますます強くなった」と回答し「子供たちと何かをやったりしていると、早く先生になりたいと思ってしまうから」と述べている。

念願叶って、幼稚園に1回目の試験で合格内定し、その職場に「大変満足」だと回答し、“自分が興味を持った幼稚園なのだし、やる気は充分あるから”と述べて「なんとかやっていけそう」と意欲のほどを示している。

### 〈保育所内定ケース〉 ケース B (保→保→保)

〔概要〕事例 B は高校保育科出身者であり入学時“保育所は0歳から5歳までと年齢幅が大きいから、いろいろな年齢の子を担当することができるから”と理由を述べて「できれば保育所に就職したい」を表明したケースである。自己の保育者への適否を“明かるくて元気だし、自分の高校時代の経験で、子供たちがたくさん集まってきてくれたし、毎週私が来るのを楽しみにしてくれていたから”と述べて「ややむいている」と回答している。2年生進学時点の調査でも一貫して保育所保母希望を表明し、実習後の自己の適性についても“自分なりに発揮することができたから”と述べて「ややむいていると思うようになった」と選んでいる。さらに“実習をしてみて入学当初よりも保育所保母にますますなりたくなかった”と記述して保育所への志向度を強めている。卒業時には保育所の就職試験を2か所受験し両方とも合格したが、より希望の強い実習園であった保育所に内定している。内定職場には「大変満足」しており“先生方がやさしく親切であるし、高校の時の実習でも、とても実習しやすかったから”と述べて「なんとかやっていけそう」と意欲を示している。

〔解説〕事例 A・B はいずれも初志を貫徹させている代表的なケースである。

事例 A の幼稚園教諭への意識や志向は学習や実習を通してますます強められていったとみられる。“子どもたちと何かをしていると早く先生になりたいと思ってしまうから”という記述からも明らかである。その思いが強まれば強まるほど希望していない保育所保母や施設保母への離反を強めていくことにもつながっているように思われる。保育所保母に対しては“特に希望していないから”であり、施設保母に対しては“思っていたよりもずっと大変ということがわかったから”と回答している。いふなればこれらの希望していない職種に対して無視ないし拒否反応を示しているが、幸いにして希望通りの進路に内定できたから良かったといえようか。

事例 B も進路こそ違え同様な経緯をたどっている。実習で自分を発揮することができたと記述しているが、その成功体験を通してますます保母職への傾斜を強めていったものとみられる。ただ希望していない施設保母に対しては無回答であり、また幼稚園教諭に対しては“保母になりたいが、幼稚園教諭にもなってみたいと思うようになった”と記述しており、その意識や志向は専門職全般に対して、より許容性を持ったものであるといえよう。

以上にわたって概説してきたように入学時、1年後、卒業時という調査時点の異なる3回の資料を同一ケースに集約して縦断的に把え直してみると、そのケースがたどった意識や志向の変容過程がかなり鮮明に浮かびあがってくるのがわかった。特に進路変更のあった者となかった者とを対比させた時、その経緯（意識や志向）の差は大きなものがあつた。また進路変更者同士の間でもケースによって、さまざまな差異を認めることができた。もち論、調査資料だけからの事例分析であるので限界はあつたが、統計的操作では見えてこないような動きをケース・スタディ的手法を通して試みようとした本調査の目標の1つが達成されたのではないかと考えている。

## 10 入学当初の希望進路と卒業時点の内定進路との関連、その経緯

入学当初のアンケートで「卒業後、できたら幼稚園に就職したい」を選択した者は41人、「保育所に就職したい」を選択した者は28人、「施設に就職したい」を選択した者は5人という内訳であった。このような当初の希望進路は2年間のプロセスの中で、保育者への志向や意識と関わり合いながら、さまざまに変容していくことを明らかにしてきたが、ここでは入学当初の希望進路と卒業時点の内定進路との関連ならびにその経緯について若干の考察を加えてみたい。第21表(1)(2)(3)は幼稚園志望者、保育所志望者、施設志望者のそれぞれについて、入学当初の希望進路から就職内定に至るまでの進路の変化と経緯の概略を表示したものである。

第21表(1)

入学当初「できたら幼稚園に就職したい」を表明した41名のその後の経緯				
2年生 進学时	卒業時	就 職 内定先	人数	備 考 (内定にいたった経緯)
幼	幼	幼	13	初志貫徹ケース、当初から一貫して幼稚園希望、幼稚園に内定する
		保	2	初志は一貫していたが、幼稚園の試験に不合格、第2希望の保育所に内定する
保	保	保	7	2年生進学时に保育所希望に変化、保育所に内定する
		幼	4	2年生進学时に保育所希望に変化、保育所の試験に不合格、幼稚園に内定する
		施	2	2年生進学时に保育所希望に変化、保育所の試験に不合格、施設に内定する
		未	1	2年生進学时に保育所希望に変化、保育所の試験に不合格、幼稚園の試験にも不合格
		他	1	2年生進学时に保育所希望に変化、その後結婚することになり就職をとりやめる
施	施	施	1	2年生進学时に施設希望に変化、施設に内定する
企	保	保	1	2年生進学时に企業希望に変化、卒業時に保育所希望に変化、保育所に内定する
	企	企	4	2年生進学时に企業希望に変化、企業に内定する
	他	他	1	2年生進学时に企業希望に変化、その後家事手伝いとなり就職をとり止める
公	公	医	1	2年生進学时に公務員希望に変化、公務員試験に不合格、医療事務に内定
未	医	医	1	2年生進学时に企業への関心を持った未定に変化、卒業時バイト先の医療事務に内定する
	幼 保	未	1	2年生進学时に進路に迷い未定に変化、卒業時保育所、幼稚園、企業の試験にすべて不合格
NR	NR	未	1	アンケートに白紙回答、一般企業の試験を受けたが自分に合っていないのでとり止める

第21表(2)

入学当初「できたら保育所に就職したい」を表明した28名のその後の経緯				
2年生 進学时	卒業時	就 職 内定先	人数	備 考 (内定にいたった経緯)
保	保	保	10	初志貫徹ケース、当初から一貫して保育所希望、保育所に内定する
		幼	5	初志は一貫していたが、保育所の試験に不合格、第2希望の幼稚園に内定する
		施	2	初志は一貫していたが、保育所の試験に不合格、施設希望にきり変え施設に内定する
	企	企	2	卒業時点では企業に変化、企業に内定する
幼	幼	幼	2	2年生進学时に幼稚園希望に変化、幼稚園に内定する
	保	保	2	2年生進学时に幼稚園希望に変化、その後保育所に変化、保育所に内定する
	未	未	1	2年生進学时に幼稚園希望に変化、その後未定に変化、就職せずフリーアルバイト希望
施	施	施	1	2年生進学时に施設希望に変化、施設に内定する
施	保	幼	1	2年生進学时に施設希望に変化、その後再び保育所希望に戻り不合格、幼稚園に内定
企	施	施	1	2年生進学时に企業希望に変化、卒業時点には施設希望に変化、施設に内定する
他	他	未	1	2年生進学时にリミック講師希望に変化、卒業時フリーアルバイトしながら進学を考える希望となる

第21表(3)

入学当初「できたら施設に就職したい」を表明した5名のその後の経緯				
2年生 進学时	卒業時	就 職 内定先	人数	備 考 (内定にいたった経緯)
保	保	保	2	2年生進学时に保育所希望に変化、保育所の試験に合格内定する
		幼	1	2年生進学时に保育所希望に変化、保育所の試験に不合格、幼稚園にきり変え内定する
		他	1	2年生進学时に保育所希望に変化、保育所の試験に不合格、家事従事、就職をとりやめる
幼	保	保	1	2年生進学时に幼稚園希望に変化、その後再び保育所希望となり保育所に内定する

### (1) 初志貫徹型ケース・初志持続型ケース

これらの表を通してみると、当初の志望を一貫して維持し続け、卒業時まで変更せず希望通りの職場に就職内定したケースは極めて少ないことがわかった。いうなれば初志貫徹型ケースといえようが幼稚園志望者では41名中13名(31.7%)、保育所志望者では28人中10名(35.7%)、施設志望者では皆無であった。合計して74人中23名(31.1%)の初志貫徹型ケースを、われわれは「第1回から第3回までのアンケートにおいて、一貫して同一職場への就職希望を表明した者で、その職場に就職内定した者」と定義し資料をまとめた。というのは既述したようにアンケートの回答でその後の進路変化が認められても、回答者自身には変化したという意識がなく進路を変更していないと回答する者がかなりいることが判明したからである。この原因についてはⅢの7で考察したのでここでは触れないが、回答者によっては適応機制のメカニズムが働いている場合もあるように思われる。

いずれにしても初志貫徹型ケースが極めて少なかった1つの理由として就職事情が大変厳しくなってきたり、同一志望をいつまでも持続していくことが困難な状況になっていることが挙げられよう。就職試験に失敗すれば進路変更は止む得ないことになるし、事前に要求水準を引き下げて通過しやすい目標に切り変えることも必要になってこよう。既述したように卒業時の第3回調査で内定までに2回以上の就職試験を要した者が37名(42.1%)を数えたことは、厳しい就職事情を物語るものと考えられる。

第21表(1)(2)で初志は貫徹できなかったが、初志を持続したケースは幼稚園志望者で2名、保育所志望者で7名を数える。したがって初志を貫徹した23名と持続した9名の計32名(43.2%)を除いた残りの42名(56.8%)の者は、いずれかの時点で入学当初に表明した志望を変化させたことになる。

### (2) 入学当初の希望進路と1年後の希望進路

進路変化のチェックポイントは2年生進学時点が1つの目安であり、その時点で相当数の進路変更者が出現している。しかし、その時点で表明された進路はその後持続し、以後の進路変更は少なくなる。本調査では2年生進学時点で進路変更が判明した者は幼稚園志望者で26名(63.4%)、保育所志望者で9名(32.1%)、施設志望者では5名全員(100%)であり合計して40名(54.1%)の多数を占めた。しかしその時点以後の進路変更者<sup>12)</sup>は幼稚園志望で2名、保育所志望者で7名、施設志望者で1名、合計して10名(13.5%)に過ぎなかった。

換言すれば入学当初に表明された進路は文字通りの1選択肢に過ぎない変動性の高い進路であって、その後の経緯によって変わり得るものであり、一方、2年生時点で表明された進路は以後持続される傾向が高く、また相応の意識や志向に裏づけられたかなり固定的な信頼度の高い進路であると結論づけることができよう。

### (3) 実習効果

実習によって積極的影響を受けた者は保育者になりたい気持が強められて希望進路を固定させていくであろうし、逆に消極的影響を受けた者はなりたくない気持が強められて進路変更へと結びついていくであろう。本調査では積極的影響を受けた者が幼稚園実習で約48%、保育所実習では約50%を占め、消極的影響を受けた者、それぞれ約23%、約21%を上まわったので全体としては実習効果があったと考えられるが、その効果は直接には専門職希望数の増加にはつながら

12) 就職試験不合格のため進路変更を余儀なくされた者は除く

なかった。むしろ実習を経験していない入学時の専門職希望者数よりも10%程度下まわった数値が示された。これについては消極的影響を強く受けた者の中から若干名が非専門職へ脱落していったことが想定されたが、この点のケース・スタディ的吟味は今後の課題として残された。

また、2年生進学時点で保育所志望者から5名の幼稚園への転向者が出たのに対し、幼稚園志望者からは16名というかなりまとまった保育所への転向者<sup>13)</sup>が出たことについては、保育所実習の方にプラス効果を受けた者がやや多く幼稚園実習の方にマイナス効果を受けた者がやや多くなっていることから説明がつくが、その差は僅差で実習効果の差というよりもその他の条件、例えば求人傾向の多寡、処遇や待遇・勤務条件の差異、友人先輩の就職動向等々が作用していることが示唆された。このあたりの再吟味が必要であるが、内的・外的要因が複雑に絡んでくるので、きちんとした条件整備をした再調査が要請されよう。

最後に施設実習効果についても触れておきたいが、マイナス効果を受けた者がより多く示され、当初施設志望者は5名全員が他志望に転じた。5名のうち1事例は施設から保育所への変更理由として“思ったより大変な仕事だと気づき、やっていく自信がない”と実習後のなりたくなくなった気持を率直に表明している。しかし他の4名は無記述反応に終始し、その理由について何も語っていないが、施設実習から消極的影響を受けて転向していった者であることが推定される。それにしてもこの5名の者が入学当初、施設に就職したい理由の中で表明した施設への熱い思いや傾斜と重ね合わせてみて、若干名は施設にとどまるであろうという期待が見事に外れたといわざるを得ない。当初施設志望者は全滅したが、当初幼稚園志望者から3名、当初保育所志望者から4名、当初進路未定者から2名の計9名の者が最終的に施設希望に転じ内定をみている。この9名の内定に至った経緯をみると、①2年生進学時点で施設希望となり内定に至った者3名 ②他の希望進路の就職試験に失敗し、施設に転じて内定に至った者5名 ③就職受験期直前に一般企業志望から施設希望に転じて内定に至った者1名という内訳であった。①に該当する施設内定者が実習による積極的影響を受けた者たちであることは申すまでもない。

#### IV. おわりに

本学幼児教育科学生の保育者への意識や志向の現状ならびに変容過程を明らかにするとともに卒業後の内定進路とどのような関わりになっているかを解明するため、アンケート調査を平成4年入学時、1年後、卒業時に実施した。その結果、明らかにされた事項を要約すると次のとおりである。

(1) 本学幼児教育科への第1志望入学者は約69%、非第1志望入学者は約31%を占めたが、前者は後者と比較して“子ども好き”“保育者になりたい”“資格を取得したい”といったカテゴリーに分類される積極的理由で入学してきた者が明らかに多く、対照的に後者は“本学科の特色や利点にひかれたから”“他校の受験に失敗、本学科に合格したから”“その他の理由”といったカテゴリーに分類される消極的理由で入学してきた者が明らかに多かった。したがって第1志望入学者の方がより保育者志向の強い学生群であることが確かめられた。

13) 入学1年後に幼稚園就職希望者が減少し、保育所就職希望者が急増する傾向は、保育科系短大学生意識調査報告書（平成5年3月卒業生対象）でも指摘されておられ、ここ数年来の全国的傾向であるように思われる。

(2) 入学時点における卒業後の希望進路は幼稚園約41%、保育所約32%、施設約6%、その他約21%であった。それぞれの希望理由を分析すると幼稚園希望者は幼児教育的機能に関係する理由を、また保育所希望者は家庭養護的機能に関係する理由を挙げる者が多く、両者間に微妙な差異が認められた。一方、施設希望者は、幼稚園・保育所希望者と異なり、高校時代のボウ経験や障害児との接触体験などを理由にあげる者が多かった。

1年後の希望進路の再調査では、幼稚園希望者が大幅に減少し、代わって保育所希望者が大幅に増加し、その比率が逆転した。施設希望者には数値上の増減はなく、したがって全体としては専門職志向者がやや減少し約76%にとどまった。

またこの時点で表明された希望進路が入学時点の希望進路と同一であり、変化していないと回答した者が約70%、その後の変更進路であると回答した者が約30%であった。しかしケース・スタディ的吟味の結果、回答者以上に多くの進路変更者が出ていることが確かめられた。その進路変更の方向は、①専門職から専門職へ ②非専門職から専門職へ ③未定から専門職へ ④専門職から非専門職へ ⑤専門職から未定へ ⑥非専門職から未定への6方向への進路変更であることが判明した。

それぞれの進路変更方向毎にその理由が分析されたが“両方の実習に行ってみて保育所（または幼稚園）の方が自分に合っていると思ったから”といった実習体験の理由をあげる者が多く、進路変更の実習が大きく影響していることが見出された。

(3) 入学時の、自己の保育者への適否については「どちらともいえない」「わからない」といった中間的選択者が半数以上にも達し、「むく」とした者は40%「むかない」とした者は6%であった。このうち「むく」理由としてあげられた主な記述内容は“子どもが好き”“子どもと遊んだり、世話することが好き”“子ども扱いに慣れているから”であった。

1年後の調査では幼稚園、保育所、施設に3区分して、それぞれの保育職への適否を求めた。実習を体験して中間的選択が少なくなったが、入学時の保育職への適否と比べると幼稚園教諭・保育所保育士に「むく」とする積極的反応がやや減少し消極的反応がやや増加した。また幼稚園教諭と保育所保育士間の回答差は認められなかったが、その理由としてあげられた記述内容に差異が認められ、幼稚園教諭の適否では教育内容的職務に肯定的理由があげられて「むく」とする者が多かったのに対し、保育所保育士の適否では養護内容的職務に肯定的理由があげられて「むく」とする者が多かった。施設保育士に「むく」とした者は極めて少数例であり、約35%の者は「むかない」に回答した。その理由として、職務の大変さをあげて自信がない体力が続かないとする者が多かった。しかし残りの約60%の者は中間的反応ないし無回答者であり、明確な態度を示さなかった。

(4) 実習体験により保育職になりたい気持が「ますます強くなった」「多少強くなった」とする積極的影響を受けた者は幼稚園実習で約48%、保育所実習では約50%、その反対に消極的影響を受けた者は幼稚園実習で約23%、保育所実習では約21%であった。その理由が分析され実習によって積極的影響を受け進路変更へとつながる契機と思われるものがいくつか考察された。

一方、施設実習で積極的影響を受けたとする者は約12%、消極的影響を受けたとする者は約26%であった。それぞれについても若干の考察が加えられた。

(5) 入学時点における保育職のとらえ方をみると、幼稚園教諭と保育所保育士とは殆んど差異が認められず、共通して1位「子ども好きでない」とつとまらない、2位「心身ともに健康でない」とつとまらない」仕事であると認識されていたが、第3位に幼稚園教諭においては「しっかりした

人生観・教育観がないとつとまらない」が続き、保育所保育では「女性にふさわしい」が続く点が微妙に異なっていた。しかし1年後の調査では幼稚園教諭も保育所保育も1位「子ども好きでないと」、2位「心身ともに健康でないと」、3位「向上心や研究心がないと」つとまらない仕事であると認識されるようになり、上位3項目は全く同じとなった。

一方施設保育に対するとらえ方は幼稚園教諭や保育所保育とは明らかに異なり、1位「地味で縁の下の力持ちのような」、2位「心身ともに健康でないとつとまらない」、3位「高度の専門的技術や知識を必要とする」、4位「重要で社会的に認められている」が続き、入学時も1年後も全く同じ順位を選択結果であり、幼稚園教諭・保育所保育のとらえ方と明確に一線が画される認識が示された。

(6) 保育者の資質の重要度においても、幼稚園教諭と保育所保育は殆んど同じ項目が同じ順位で選択されており、「健康」「子ども好き」「子どもの理解」「明朗・活発」は共通し、第5位に幼稚園教諭では「指導力」、保育所保育では「世話好き」が位置づけられた。つまり幼稚園教諭と保育所保育の資質の差異は上位4項目は全く同じで第5位が幼稚園は「指導力」、保育所は「世話好き」であるという認識が示された。

一方、施設保育に必要な資質は「健康」「根気強さ」「専門的技術・知識」「熱意（意欲）」「責任感」であり、幼稚園教諭・保育所保育で選ばれた項目とは明らかに異なった。

(7) 卒業時の調査時点における就職内定者は88名、未定者6名、その他6名という内訳であった。このうち、幼稚園教諭32名、保育所保育34名、施設保育（介護職含む）9名の計75名の者が専門職に内定したが、そのうち第1回の就職試験のみで内定をかちえた者は約54%に過ぎず、残りの約46%の者は2～5回の試験を必要とし、大変厳しい就職事情が反映された。

内定者88名の者については、その内定職場（職種）が入学当初からの希望進路であるかどうか、更に入学時の希望進路と異なった進路に内定した者についてはその経緯や理由を自由記述させたが、統計的操作だけでは入学当初の希望進路と卒業時の内定進路との関わりやその経緯を明らかにし得ない限界が感じられた。そこで数例をとりあげて事例研究的にその経緯に跡づけを試みた。入学時、1年後、卒業時の3回の調査から得られた資料を同一ケースに集約して考察するという簡単な事例研究ではあったが、そのケースの保育者への意識や志向の水準、進路変容の経緯、内定進路に対する満足度と意欲の程度などをかなり鮮明に浮かびあがらせることができた。

(8) 入学当初幼稚園志望を表明した者は41名、保育所志望を表明した者は28名、施設志望を表明した者は5名であったが、この者たちが就職内定に至るまでの進路の変化と経緯をたどってみると、いわゆる初志貫徹型ケースが極めて少ないことが判明した。入学時の志望を一貫して持続し希望通りの職場に就職内定した者は幼稚園志望群では約32%、保育所志望群では約36%、施設志望群では0%であった。初志は持続できたが就職試験で脱落し、希望の職場を貫徹できなかった初志持続型ケースを加えても約43%程度の者にとどまった。したがって残りの約57%の者はいずれかの時点で初志を変更していることが明らかとなった。そのチェックポイントは2年生進学時点であり、この時点の調査で約半数の者が入学当初の進路を変更していることが判明した。幼稚園志望者で約63%、保育所志望者で32%、施設志望者では100%の者が他の進路に変更していた。しかしその時点を過ぎると、換言すれば2年生進学時点で表明された進路はその後持続し、以後の進路変更者は少数例となることも明らかとなった。つまり入学当初に表明された希望進路は1選択肢に過ぎない変動性の高い進路であって、その後の経緯によって変わり得るもので

あり、一方、2年生時点で表明された希望進路は相応の意識や志向に裏付けられたかなり固定性のある信頼度の高い進路であると結論することができた。

(9) 実習効果についても若干の考察が試みられ、2年生時点で積極的影響を受けた者は幼稚園実習で約48%、保育所実習で約50%であった。消極的影響を受けたそれぞれ約23%、約21%の者を上まわったが、全体の専門職希望者数の増加にはつながらなかった。ただ個々の事例分析においては実習によるプラス・マイナス効果が明らかに示されるケースが多く、進路変化の契機になったと考えられた。また入学時の幼稚園希望者からかなりの数の保育所への進路変更が出たことについては、実習効果差というよりは他の条件差によるものと示唆され、その吟味が今後の課題とされた。

### 参考文献

- ・日本私立短期大学協会保育科研究委員会 保育科系短大学生意識調査報告書（平成3年4月入学生対象）（平成5年3月卒業生対象）  
日本私立短期大学協会 平成3年12月、平成5年11月
- ・小舘静枝・西方栄他 保育者志向に及ぼす実習体験 日本保育学会第45回大会研究論文集
- ・大井晴策・永井千恵子他 保育科学生の保育職に対する意識の変容過程について（8）（9）（10）  
日本保育学会第40回、41回、42回大会論文集



II あなたの本学での資格取得希望は次のどれですか。あてはまる番号に○をつけ、その理由を（ ）に具体的に記入してください。

- |  |   |        |   |  |
|--|---|--------|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 保母資格だけ</li> <li>2 幼稚園教諭免許状だけ</li> <li>3 保母と幼稚園の両方の資格・免許状</li> <li>4 その他（具体的に_____）</li> </ol> | } | ⇒ その理由 | { |  |
|--|---|--------|---|--|

III あなたの卒業後の進路は、次のどれですか。あてはまる番号に○をつけ、その理由を（ ）に具体的に記入してください。

- |  |   |        |   |  |
|--|---|--------|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 できれば保育所に就職したい</li> <li>2 できれば幼稚園に就職したい</li> <li>3 できれば施設（福祉関係）に就職したい</li> <li>4 その他（具体的に_____）</li> </ol> | } | ⇒ その理由 | { |  |
|--|---|--------|---|--|

・なお、上記質問で1・2・3に○をつけた人は、その仕事をどのくらい続けたいですが。次の記述からあてはまるものを1つ選んでその番号に○をつけてください。

- 1 生涯の仕事として続けたい
- 2 結婚するまで働きたい
- 3 出産するまで働きたい
- 4 一時やめて、子どもが大きくなったら、また働きたい
- 5 まだわからない

IV あなたは自分が保育者にむいていると思いますか。あてはまる番号に○をつけ、そう思う理由を（ ）に具体的に記入してください。

- |  |   |          |   |  |
|--|---|----------|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 非常にむいている</li> <li>2 ややむいている</li> <li>3 どちらともいえない</li> <li>4 あまりむいていない</li> <li>5 全くむいていない</li> <li>6 よく分からない</li> </ol> | } | ⇒ そう思う理由 | { |  |
|--|---|----------|---|--|

V 次に記述されている保育者の資質の中で、特に重要と思われるものを5つ選び、重要と思われる順に、その番号を□に記入してください。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1 健康である       | 9 子どもを理解する   |
| 2 明朗・活発である    | 10 責任感が強い    |
| 3 子ども好きである    | 11 指導力がある    |
| 4 研究心がある      | 12 根気強い      |
| 5 熱意(意欲)がある   | 13 創造性に富んでいる |
| 6 子どもの世話好きである | 14 共感性が豊かである |
| 7 専門的知識・技術がある | 15 ピアノが上手である |
| 8 協調性がある      | 16 社会常識がある   |

重要順	番号名
1位	
2位	
3位	
4位	
5位	

VI 一口に保育専門職といっても、幼稚園・保育所・施設というように、職場や仕事内容が異なります。次にあげる記述の中から、それぞれの幼稚園・保育所・施設ごとに最もあてはまるものを3つ選んで、イメージの強い順にその番号を□に記入してください。

- 1 子どもが好きでないと務まらない仕事だ
- 2 向上心や研究心がないとついていけない仕事だ
- 3 心身共に健康でなければ務まらない仕事だ
- 4 地味で縁の下の力持ちのような仕事だ
- 5 対人関係のむずかしい仕事だ
- 6 女性にふさわしい仕事だ
- 7 しっかりした人生観・教育観がなければできない仕事だ
- 8 重要で社会的にも認められている仕事だ
- 9 高度の専門的技術や知識が要求される仕事だ

種別 イメージ順	幼稚園	保育所	施設
1位			
2位			
3位			

・最後に、あなたは本学に入学できて良かったと思いますか。あてはまる番号に○をつけてください。

- |             |           |           |
|-------------|-----------|-----------|
| 1 大変良かった    | 2 まあ、良かった | 3 どちらでもない |
| 4 あまり良くなかった | 5 良くなかった  | 6 わからない   |

あなたの学籍番号のみ記入してください (          番)

ご協力ありがとうございました。

## 第2回調査用紙

## 保育系学生の意識調査

## 〈記入上のお願い〉

この調査は、幼児教育や保育を学ぶ学生の意識を調査し、今後の保育者養成に役立てようとするものであります。今回は第2年次調査であります。結果は前回と同様、すべて統計的に処理しますので、特定の誰々さんの意見や考えを取り上げたり、問題にしたりすることは絶対ありませんので、あなたの現在の気持ちや考えを自由にありのままにご回答くださるようお願いいたします。

平成5年4月 豊橋短期大学福祉・保育研究室

問1 あなたは現在、どんな分野のゼミを専攻されていますか。あてはまる番号を○で囲んでください。なお、1と答えた方は、その内容を（ ）に具体的に記入してください。

- 1 ゼミに所属している ( ゼミの名称 専攻分野など具体的に )
- 2 ゼミが設けられていないので所属していない

問2 あなたは、これまで障害者や高齢者の介助などの狭い意味に限らず、広い意味でのボランティア活動をしたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください。なお、1と答えた方は（ ）にその内容を具体的に記入してください。

- 1 ある ( その内容、団体名や活動内容、時期、期間など )
- 2 ない

問3 あなたは現在、どのような資格取得希望をもって勉強されていますか。あてはまる番号を○で囲んでください。

- 1 保母資格だけ
- 2 幼稚園教員免許状だけ
- 3 保母資格と幼稚園教員免許状の両方
- 4 その他 ( 具体的に記入してください )

問4 問3で答えたあなたの現在の資格取得希望は、入学当初と比べて変化してきていますか。あてはまる番号を○で囲んでください。なお、1と答えた方は、その内容を（ ）に具体的に自由記述してください。

- 1 入学当初と比べて変化してきた（どのように変化してきたか具体的に）  
( )
- 2 入学当初と比べて、少しも変化していない

問5 あなたは現在、卒業後どのような進路へ進みたいと思っていますか。あてはまる番号を1つだけ選んで○で囲んでください。

- 1 保育所保母    2 幼稚園教諭    3 福祉施設保母・寮母    4 一般公務員  
 5 一般企業    6 進学    7 その他 (具体的に記入してください)  
 8 未定

問6 問5で答えたあなたの現在の希望進路は、入学当初と比べて変化してきていますか。あてはまる番号を○で囲んでください。

- 1 入学当初と全く同じ、少しも変化していない  
 2 入学当初と比べて、少し変化してきた  
 3 入学当初と比べて、かなり変化してきた  
 4 入学当初と比べて、はっきり変化した

問7 問6で2・3・4と答えた方にうかがいます。あなたの希望進路が入学当初と比べて変化してきたということですが、具体的にどのような進路から、どのような進路に変化してきたのですか。回答例にならって番号で答えてください。そしてなぜ変化してきたのか、その理由や原因を[ ]に具体的に自由記述してください。

回答例1 幼稚園教諭から保育所保母に希望進路が変化してきた場合  
 (問5で、幼稚園教諭は2、保育所保母は1であるから) 2 → 1

回答例2 一般公務員から進学に希望進路が変化してきた場合  
 (問5で、一般公務員は4、進学は6であるから) 4 → 6

希望進路 入学当初→現在	なぜ変化してきたのか その理由、原因 (具体的にくわしく記入してください)
→	

問8 あなたは第1学年次で、どのような実習を受講しましたか。あてはまる番号を○で囲んでください。あてはまるもの、すべてに○をつけてください。(複数回答)なお( )に受講された実習の期間、程度、内容などを具体的に記入してください。

- 1 保育所実習 ( )  
 2 幼稚園実習 ( )  
 3 施設実習 ( )  
 4 受講しなかった

問9 あなたは第1学年次で、いろいろな実習を体験されましたが、その実習をした後で、幼稚園教諭、保育所保育、福祉施設保育になりたい気持ちが強くなりましたか。あてはまる番号をそれぞれ体験した実習別に□に記入してください。体験しない実習については記入する必要はありません。そして、なぜそのような気持ちになったのかその理由や原因を自由記述してください。

- 1 ますます強くなった
- 2 多少は強くなった
- 3 変わらない
- 4 多少うすれてきた
- 5 なりたくなくなった
- 6 その他

実習後の気持	番号	なぜそのような気持ちになったのか理由・原因
幼稚園実習後 幼稚園教諭に なりたい気持		
保育所実習後 保育所保育に なりたい気持		
施設実習後 施設保育に なりたい気持		

問10 あなたは第1学年次で、いろいろな実習を体験され、その実習を通して自分が幼稚園教諭、保育所保育、福祉施設保育にむいていると思いませんか。あてはまる番号をそれぞれ体験した実習別に□に記入してください。そして、なぜそう思うようになったのか、その理由や原因を自由記述してください。体験しない実習については記入しなくてよい。

- 1 非常にむいていると  
思うようになった
- 2 ややむいていると思  
うようになった
- 3 どちらともいえない  
と思うようになった
- 4 あまりむいていない  
と思うようになった
- 5 全くむいていないと  
思うようになった
- 6 よく分からない

実習を通しての気持	番号	そう思うようになった理由・原因
幼稚園実習を通 して幼稚園教諭 への適性		
保育所実習を通 して保育所保育 への適性		
施設実習を通し て施設保育への 適性		

問11 あなたは第1学年次でいろいろな実習を体験されて、幼稚園や保育所、施設のそれぞれの仕事に対して、どのようなイメージを持ちましたか。次にあげる記述の中から最もよくあてはまる番号を、それぞれ体験した実習別に3つずつ選んで□に記入してください。体験しない実習については無記入でよい。

- 1 子どもが好きでないと思われない仕事だ
- 2 向上心や研究心がないと、ついていけない仕事だ
- 3 心身ともに健康でなければ務まらない仕事だ
- 4 地味で緑の下の力持ちのような仕事だ
- 5 対人関係のむずかしい仕事だ
- 6 女性にふさわしい仕事だ
- 7 しっかりした人生観、教育観がなければ出来ない仕事だ
- 8 重要で社会的にも認められている仕事だ
- 9 高度な専門的技術や知識が要求される仕事だ

イメージ	番号		
幼稚園実習を通 して幼稚園の仕事 をどう思ったか			
保育所実習を通 して保育所の仕事 をどう思ったか			
施設実習を通し て施設の仕事 をどう思ったか			

問 12 あなたは第 1 学年次で、いろいろな実習を体験され、その実習を通して幼稚園教諭、保育所保母、福祉施設保母としてやっていける自信ができましたか。あてはまる番号をそれぞれ体験した実習別に□に記入してください。そして、そう思うようになった根拠、或は理由、原因など自由記述してください。体験していない実習については無記入でよい。

- 1 十分にやっていける自信が ついた
- 2 何とかやっていけそうな 気になってきた
- 3 あまり自信がなくなった
- 4 全く自信がなくなった
- 5 その他 (どんな気持なの か具体的に記入してくだ さい)

自 信	番号	そう思う根拠, 理由・原因
幼稚園実習を通 して幼稚園教諭 への自信		
保育所実習を通 して保育所保母 への自信		
施設実習を通し て施設保母への 自信		

問 13 次に記述されている保育者の資質のうち、特に重要と思われるものを幼稚園教諭、保育所保母、福祉施設保母ごとに、それぞれ 3 つずつ選んでその番号を□に記入してください。

- |               |            |
|---------------|------------|
| 1 健康である       | 9 子どもを理解する |
| 2 明朗・活発である    | 10 責任感が強い  |
| 3 子ども好きである    | 11 指導力がある  |
| 4 研究心がある      | 12 根気強い    |
| 5 熱意 (意欲) がある | 13 創造性に富む  |
| 6 子どもの世話好きである | 14 共感性が豊か  |
| 7 専門的知識・技術がある | 15 ピアノが上手  |
| 8 協調性がある      | 16 社会常識がある |

資 質	番 号		
幼 稚 園 教 諭			
保 育 所 保 母			
福 祉 施 設 保 母			

問 14 最後に、あなたは本学に入学して、今現在よかったと思っていますか。あてはまる番号を○で囲んでください。

- |             |           |           |
|-------------|-----------|-----------|
| 1 大変よかった    | 2 まあ、よかった | 3 どちらでもない |
| 4 あまりよくなかった | 5 よくなかった  | 6 わからない   |

あなたの学籍番号だけを記入してください (                  番)

ご協力ありがとうございました。





